
はなだね small bouquet for you

りゅうらんぜっか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はなだね small bouquet for you

【Nコード】

N5250W

【作者名】

りゅうらんぜっか

【あらすじ】

俺の名前は辻村紅^{つじむら}高校3年生。ライトノベルや恋愛シミュレーション^{くもん}にありがちな『普通の高校生』だ。3年生になった今年、黒羽^{くろは}雪見^{ゆきみ}との出会いによって俺は大きな困難に立ち向かうことになる。その結果は？雪見とは結ばれるのか？trueルート^{true}を最後まで描く、そんな学園物語。

4月3日(前) (前書き)

この作品は昔自分達が作っていた黒歴史ギャルゲー『はなだね』に出てくるヒロインの一人、黒羽雪見のルートを小説版にリライトしたものです。

ゲーム自体は途中までできていたのですが、黒歴史作品ではお約束の『途中放棄』により、お蔵入りしました。

しかし、自分が書いた黒羽ルートは最後まで完成しているので、折角だからこうして投稿してみました。

かなり稚拙な文章とストーリーで、見苦しい部分が多々あるとは思いますが、読んで頂けたら幸いです。

基本的にtrueルート一直線なので、バットエンドになることはありません。

部分的にファンタジーが混ざっていますが、どちらかと言うと学園ものです。

なお、物語の途中に、現実とは比べものにならないくらい幼稚で、あくまで想像ではありますが『いじめ』のシーンが含まれています。苦手な方や不快に思う人は『戻る』ボタンを押して下さい。

また、少々ネットスラングやメタ発言があります。こちらも苦手な方はお引き取り下さい。

それでも大丈夫だという方は、よければ最後までお付き合い宜しく
お願いします。

4月3日(前)

「でありまして、こうして皆さんの元気な姿を見ることができて
」
「ふああああ…」

俺はここで出さないでいつ出すんだといわんばかりに主張してきた
欠伸を噛み殺す。

「早くおわんねえかな…」

そんな願いが通じる訳もなく、嘎れた声はテンプレな挨拶を続ける。

「これから一年、心機一転して学業や部活動に勤しみ」

一体今なにが行われているかというところ…

…まあ説明するまでもないが、今は敵かな雰囲気が始業式が行われ
ている。

俺はそれなりに大きな体育館の左下隅を陣取っている、所謂『三年
生』の集団の中にいる。

人並み以上に身長は高いから、出来が悪い海苔のような、身長差に
よる凸凹した生徒達の頭を見ることができ、勿論壇上も見える。

その壇上には若干髪の毛が薄くなっているが他の髪を寄せることで
辛うじて禿を阻止している校長が突っ立っていて、挨拶の最中だ。

『校長挨拶マニュアル』53ページ辺りにありそうな型にぴったり
当てはめて作りました的な挨拶は続く。

「今年も様々な行事があり、忙しくなるとは思いますが」

長つたらしい挨拶の間に俺も校長に比肩する位テンプレな自己紹介をしておく。

俺の名前は辻村紅^{つじむら こう}。高校三年生。

母親がいない、父と妹の三人家族だ。

父は今やテレビで自分のコーナーがあるほどの有名な弁護士で、俺はそれ以外で父を見る機会がほぼ皆無。

つまりは家に帰ってくるのが滅多にない。

妹は病弱で現在町の一番大きな総合病院に入院中。

俺は特に特筆することも無いような人生を送っている。

普通に生活して、普通に進学して、普通に社会に出る。

今や湯水のようにわさわさ出ているライトノベルの主人公にありがちな『ごく普通の高校生』…の部類に当てはまる。

オマケに部活にも所属していないので、更に無特徴成分を加速させている。

一応弁解しておくが、俺が部活に入っていない理由はある。

だが、今ここで説明しても仕方がないのでそれは後に回すことにする。

そんな俺も今日で三年生になったが、周りとは一番大きな違いは『目標』か。

周りの部活動をやっている人間は所謂『最後の大会』に向けて程度の差はあれど目標はある。

が、部活に入っていない、大学も決めていない俺に目標なんてものは存在せず、ゴールのない馬拉ソンを永遠と続けているようなものだ。一言で言うと俺の人生は『無意味』なのである。

いてもいなくても変わらない俺に、一体この先何が待っているというのか。

…なんか発想が中二病臭くなってきたな。

それに振り返るほど鬱になってくるなおい…。

「…というわけで皆さんこれから頑張ってください」

沈んでいく気分には救いの手を差し出すかのように、グットタイミングで校長の話が終わる。

まあ今は深く考えずに適当に生きていこう。

折角三年になったばかりなんだ、まだ先の話は考えるべきではないだろ。

そう思い直して、生徒会の声高な「解散」という言葉を聞き流して、俺はむさ苦しい体育館から早足で出て行く。

…と言うわけにはいかず、生徒を吐き出す出口はとてもしゃないが中の人数をスムーズに出すことができず、俺は足止めを食らう。

「ちょ…押すなよ」

大繁盛している『波のプール』と似た光景が目の前に広がり、俺は人の波にもみくちゃにされる。

「ちょ…やだっ、痴漢っつ、んんっ!」

明らかに男の声なのに喘ぎに近い声を漏らしている馬鹿がいたような気がしたが、無視することにする。

今はとにかくここを抜け出すことだけを考えるんだ。

俺は満員電車の中のようなこの場所から一刻も早く抜け出すため、かき分けるようにして進んだ。

「…、やれやれ」

なんとか脱出が成功した俺は思わず「フーツ」と映画チックな息を

吐いてしまっ。

今は数多の教室が並ぶ廊下をだらだらと歩いている。

やれやれ、朝っぱらから汗かかせるなよ…

運動したわけでもないのに俺の額からは汗がにじみ出ている。

俺はズボンの右ポケットに突っ込んでおいたハンカチを取り出そうと手を…

…ない…だと…？

慌てて服に付いている全てのポケットを触ってみたがみたが、ハンカチらしきものはない。

あるのは今朝何故か拾ってしまった星形のキーホルダーだけ。

畜生…さっき落としてしまったか…！

妙な屈辱感を覚えた俺は思わず舌打ちしてしまう。

今から体育館に戻って探そうかと考えたが、あの人混みを思い出すとげんなりした。

きっと誰かが拾ってくれたんじゃないかなろうかと、無意味な希望的観測をしてしまう。

だがすぐにあの数の生徒に悪意なく踏まれてボロぞうきんのように変わり果てたハンカチしか想像できなくなる。

はあ…朝から最悪だよ…

盛大なため息をついて踵を返そうとしたそのとき

「あ…あの…」

なにかが聞こえた。

普通なら聞き取れないようなそれだが、どこか聞き逃せない雰囲気がある。そこにはあった。

「…?」

振り返ってしまふ…いや、振り向かないといけない。

「…す…せ…」

そこには小さく息を吐き、胸元に手を当てて呼吸を整える女の子の姿が。

まさか走ってきてくれたというのだろうか。いや、そんなことより

「な…なん…だと…!？」

意外な展開に俺は無意識に素っ頓狂な声をあげてしまった。

「…すいません…」

生涯染める必要など一切ない程の美しい黒髪に、可愛らしいリボンで結ばれたツインテール、そして童顔が抜けきらないものの、よく整った顔立ち。

二次元の女の子をそのまま三次元に次元転換させたような美少女がそこにいた。

なんだ!？俺は知らぬ間にギャルゲーの世界に潜り込んでしまったのか!？

そう錯覚させるほどの破壊力であったが、周りを見渡せばそこはいつもの学校と変わらない。どうやらちゃんと現実世界のようなのだ。

じゃあこの子がギャルゲーから現実世界に彷徨ってきたというのか!？

目を見開いて勝手な妄想を続ける俺を見る彼女は、どこか怯えたような表情だ。

これでは俺がまるで小動物を威嚇する獣のようではないかっ。

瞬時にコンビニなんかで使われる接客用の笑顔を浮かべ、こう出だしを伺ってみた。

「俺に何か用ですか？」

今にも歪んでしまいそんな笑顔を必死で保ちつつ、さっきからずっと上目遣いで見てくる彼女の返答を待つ。

そこでの彼女の返事は、俺の期待の斜め上を駆け上っていた。

「…これ…落としましたよ…」

スツと、雪のように純白な手から差し出されたのは、先程ボロぞうきんと確定したはずのハンカチが。殆ど汚れた形跡は無く、俺が登校前に持ってきた状態と遜色なかった。

「ありがとう、どこで拾ってくれた？」

「…体育館の出入り口で」

どこかやりきれない表情のまま視線を逸らした彼女は、拡声器がほしくなるような小さな声でそう言った。

やっぱりさっきあそこでもまれたときに落としてしまったのか。しかし、と納得しきれない俺は思ってしまう。

あんな足元も確認できやしない混乱した場所で、よくもここまで綺麗なままで拾うことができたのかと。

思わず聞いてしまう。

「そうだったんだ。でもあそこ凄い人の数だったよね。良く見つけられたね」

そう純粋な気持ちで質問したはずなのに、まるで彼女は嫌みでも言われたかのような受け取りをし、落ち込んだ顔になる。

「…私、よく下を見て歩いているので…」

そう言っつてそれを体現するかのように本当に下を向く美少女。

折角可愛いのに、宝の持ち腐れじゃないか…と、喉元まででかかった言葉を辛うじて飲み込む。

同時に謎の罪悪感が胸に突き刺さる。

「…たまたま、あなたの後ろを歩いていたので落ちたのをすぐ拾うことができました」

「すぐに『落としましたよ』って声をかけたのですが…気付かれなくて…」

ぼっきりと根元が折れたかのように首を垂らして俯いたまま彼女はそう言った。

ぐ…と、俺はこんな可愛い娘から声をかけられたのに気付かず、あの馬鹿の喘ぎ声に気付いてしまった自分の愚かさに憤怒する。

「ゴメン…、でも本当にありがとうね」

そう言っつて女神に保護されたなんと強運なハンカチを受け取る。

「それじゃ…」

そう呟きながら俺の脇を通り抜け、あっという間に角まで走っていく女の子

ハンカチをポケットに入れることに気を取られすぎている俺は反応が一瞬遅れる。

「あ、ちよつと！」

俺のベタな引き留めも虚しく、彼女は階段を駆け上っていった…
一人取り残され立ちつくしている俺を、教室に向かう生徒達は奇異
な目を向けながら通り過ぎていく。

…なんだっただ…あの子…

あんな可愛らしい子から落としたハンカチを受け取るだなんて、そ
れこそライトノベルやギャルゲーの話じゃあないか。

…いや、今時そんな手垢のついたイベントを使う人なんかいないか…
あまりに非現実な出来事に、俺は一つの仮説を提示させる。

そう考えるや否や半ば反射的に自分の頬を抓る。当然この行為の根
底には『夢』の有無の確認がある。

「いててててっ」

当たり前と言わんばかりに痛みが全身を駆けめぐる。

分かり切ったことではあったが、認めなければならぬようだ。

これは夢や幻ではない、紛れもない…現実…

ひよっとして、俺ってラッキー？

そう思った矢先…

ざわ…ざわ…

無視することのできない視線の雨を感じ、俺は首を扇風機のように
180度回す。

…

感じていた視線は教室の中で談笑をしていた新2年生によるもので、
それはとっても可哀想なものを見る目だった。

むしる廊下に佇んでいたかと思えば頬を抓り出す奴を見て冷たい視
線以外を送る人間がいるだろうか、いやいな。

「は…ははははは」

苦笑いを浮かべ、逃げるように早足でその場を立ち去る以外の選択肢は残されていなかったようだ。
さっさと3年の教室が連なる4階に向かうことにした。

そういえば新しいクラスを確認していなかった俺は4階に行った後その深刻な事態に気付き、面倒千万ではあるがそれを張り出して1階の多目的ホールに足を向ける。

自分が3年3組だと知り、1階から4階までうんざりしつつも上がり、自分の席に着いたときにはもうくたくただった。

3年生の教室が4階にあるのは『最高学年だから』というのは建前であって、本当はこの先運動不足になりがちな受験生に少しでも運動させたいという先生達のありがたいありがたい気遣いなんかじゃないかと思ってしまう。

無駄な体力を浪費した俺はさっきの女の子ではないが、少し弾む呼吸を整えつつ机に体を預ける形で倒れ込む。

俺の席は比較的窓側に近い場所で、後ろから2番目という居眠りをしていてもややばれない、なかなか良い席だ。

「あー…だるい」

普段運動をしない俺にとって、この往復は正直骨が折れる。改めて自分の体力のなさを呪う。とにかく今は動きたくない。

初っぱなからこんな状態じゃ駄目じゃないか…と自問したが、すぐさま消失する。

クラス表をパッと見た限り一、二年で顔見知りの奴等ばかりで、今更自ら歩み寄って挨拶を交わす必要もない。

そういう安心感もあって俺は体を休めることに耽ることができ…

「おーい、お前体育館から教室まで何時間かかってんだよ？」

…そうもなかった。

「おーい、お前体育館から教室まで何時間かかってんだよ？」

一言一句違わない、全く同じ言葉が俺の右耳に嫌でも滑り込んでくる。

誰とは言いたくもないが、敢えて言うならあの馬鹿がこいつだ。

「おーい、お前体育館から教室まで何時間かかってんだよ？」

台本でも用意したのかと疑いたくなるようなその熱烈な繰返しに、怒りの感情以外こみ上げなくなる。

「おーい、お前体育館から教室まで何時間かかってばげごはあ！？」

俺の顔に隠れていた右拳を何の躊躇いもなく声の出何処にぶつける。案の定顔面直撃したそいつは、溢れ出る快楽を一切自重しないで、満面の笑みをこぼしていた。

ちなみに今の地の文は嘘偽りもない、真実のみを綴ったつもりだ。

「いんぐててて！な、なにするんだよ！」

すぐに我に返ったそいつは、綺麗にはいった左頬をさすりながら抗議してくる。

「いや、顔面に殴って下さいって言うフリだろ？」

「誰も『殴るなよ？絶対に殴るなよ？』なんて言ってるよ！」

「あーも、面倒臭いから一人でしてるよ」

「でもそれじゃイカ臭くなるけどってか！？H A H A H A H A H A
「！」

…またこうしてこいつと中身のない会話を一年間続けることになる
のか…

俺にうざったい程構ってちゃんオーラを出すこいつの名前はk（以
下省略）

「kは流石に酷くねえか！？キング・オブ・ファイタンスK O Fのあの人ですかーっ！？」

人の地の文を読まないでくれないかな…

「こいつの名前は倉金達也。くらかねたつや性格を一言で表すと」 『だ』

「なんだよその空欄に何が入るんだよ！？ってかなんだその説明口
調は？！」

「童貞には見えないんだなあ、これが」

「なん…だと…？いい、いやいや、俺は見えていたんだけどね？見
えていたんだけどねっ？」

「すまん、見えたら童貞だったわ」

「ど、ど、ど、ど、童貞ちゃうわー！！」

両手を突き出し手を振る姿が実に童貞らしい。

「ところでその右手に持っている小冊子はなんだ？」

俺は達也の右手に握られた冊子を指さして聞いてみる。

薄い本を丸めて手に収めた感じのそれは、この場に余りに相応しく
なかった。

「ん？台本だけど」
「やっぱりあったのかよ！！」

ガラッ

俺のツッコミとほぼ同時のタイミングで唐突に黒板に近い方の扉が音を立てて開けられる。

「…！」

クラスの中の生徒という生徒から私語は消え失せ、一斉にその扉に注目を集める。

例外なく俺も達也もざわついた教室に一転の静けさを叩きつけた扉の先に視線を向ける。

「は、はい！席についてくださあい！」

ひょっこり出てきた教師は、去年お世話になった国語の教科担当の先生だった。

身長は150いくかないかの低身長。ショートの美しい茶髪に、さっきの女の子にひけをとらない童顔。加えて何が詰まっているんだとツッコミたくなるような豊満な胸。

俗に言う『ロリ巨乳』で、かなりマニアックな路線に属する、AV z…先生だ。

教師歴2年という、所謂新米教師といったところか。
去年結婚もしており、それが知らされたとき、その愛くるしい笑顔に虜になった男子生徒達のあの絶望した顔は記憶に新しい。

『NTR！？俺のまかりがNTRされたって！？イヤッッホオオオオウウウー！！』

だが、NTR属性をも取得し、正にHENTAIの天下無双を突き進む達也に隙はなかった。

まあそんなどうでも良いことはともかく、結婚相手もここの学校の体育の先生という事もあり、今幸せの絶頂を迎えていることだろう。両方の意味で。

「…と言うことで、この3年3組の担任になりました甲斐中まかりかいなか まかりです。みなさん宜しくお願ひしますねえ」

HRが始まり、卒業式以来久し振りに役目を貰った黒板がチョークをノリ良く滑らせたためか、非常に可愛らしい字で先生の名前が黒板の中央を縦断する。

というか半分まる文字であり、本当に国語の教師なのかと疑いたくなるが、可愛いからそんなことは瑣末な問題である。ちなみにではあるが、まかり先生は、結婚した体育の先生とは、学校上では違う姓を名乗っている。

「んふっ、可愛いよっ。書いた文字もっ、身体もっ。んふっ」

その崩れた顔を自重しようとしなない達也を尻目に、俺はこの先生が担任で良かったとほくそ笑んだ。

彼女のとても成人とは思えない（一部を除く）ロリ体型による癒しもさることながら、なにより『楽』なのだ。

その身体立ちに見合った性格であり、よく言えば優しく、悪く言えば甘い。

また、俺達の担任をするということは、先生が専門とする国語も俺達のクラスに教えると言うことになる。

宿題を一つ出さなかっただけで単位の生死を持ち出す教師もいる中、例え宿題を全部出さなくてもなんだかんだで単位をくれるのがこの

人だ。

別に俺が宿題をサボる癖があるというわけではないが、最悪出さなくても大丈夫という保険があるだけでその安心感は飛躍する。

更に言わせてもらえば授業中何をしていようが何も言われないので、内職や居眠りもやり放題という、『あたり授業』が出来上がる。

良いね良いね最っ高だねえ！

達也までとはいかなくても、ついつい顔が綻んだことに気づき、自制しようと右手で頬を押さえつけたそのとき

「いやーっ、まかりせんせーでホント良かったねっ。すっごく楽しっ」

！？

俺の心の中を見透かし、代弁したかのようなそのあまりに的確な言葉に、手で押さえつけなくとも頬が引き締まる。

だが、この声色はどこかで聞いたことがある。いや、聞いた。

「皆さんは今年受験生で、勉強が本格的に忙しくなるとおもいますが」

一生懸命担任を演じようとするまかり先生には悪いが、この事態には後ろを振り向かざるを得ない。

恐る恐る肩越しに背後を見る。

「ねっ？」

悪戯を考え、うまくいったときの結果に心を躍らせる少女のような笑顔がそこにはあった。

隣の人に話しかけていたのを、俺に話しかけていたんじゃないかと勝手に勘違いしていたわけではなかったので、その点は安心する。

「…やはりお前か、栗崎」

「あはっ、やつぱり辻村くんだったんだねっ」

その言葉から察するに、栗崎は俺かどうか確かめるべくあたかも隣の人に話しかけているんですよ的な台詞を言っただけを見たわけかなんか見事に罠にはめられてような気がして、少し悔しい。

そんな俺とは裏腹に、そんな悔しさも馬鹿馬鹿しく思えてくる改心の笑顔を惜しげもなく見せながら彼女は言葉を続けた。

「今年も同じクラスだねっ。これから一年間よろしくねっ」

駄目だしにウインクまでかましてくる。なんだこいつ、天然で男を落とせる天才かつ。

…ここいらで、また説明臭くなって申し訳ないが、彼女を解説しよう。

彼女は栗崎あずき、元ヒロイ…高校2年から同じクラスメイトである。

肩ぐらいまでかかった栗色のストレートの髪で、前髪は三角のピンで髪を分けているこれまた美少女である。

彼女を端的に言い表すと『元気娘』である。

かなり明るい性格で、彼女の顔から陰りを見たことは、少なくとも俺はない。それくらい彼女はいつも快晴の笑顔模様なのである。

先程のやりとりで分かるように、不純物など欠片もない天然で女の子らしさを振りまくので、コロッとやられた男は数知れない。

そんな彼女は陸上部の部長を務めている。…厳密に言うとな務めざるを得ないが表現としては正しい。

つまり今現在陸上部には彼女しか部員がおらず、今年で部員が集まらなければ廃部の可能性もある、正に崖っぷちな状態だ。

その部員集めを手伝うというのはまた別の世界線の話。

「ああ、今年もよろしくな」

栗崎には劣るが、こちらも笑顔を差し出して答える。

それに対しニツと擬音が飛び出してきそうな程見えていて気持ちが良い笑顔を返してきた。

「うんっ、よろしくねっ」

これを誰であろうと無条件でやってくれるのだからたまったものじゃない。それに狙ってやっていないというのだから恐ろしい。

俺はこのままずっと見ていたい衝動をぐっと堪え、視線をまかり先生に向け直し、HRが終わるのを待ったのだった。

4月3日(前) (後書き)

という訳で前半終了です。

所謂『日常パート』ですので、適当に読み流して頂けたのではない
でしょうか。

後半は妹の登場ですよ！

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月3日(後) (前書き)

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きを読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで後半です。文章が長くなってしまいました。すいません。

日常パートはもう少し続きます、クスリときてもらえれば幸いです。

4月3日(後)

「、それでは今日はここで終わりにしますね。また明日、お会いしましょう!」

そんなまかり先生の締め言葉を切り口に、ざわっと一斉に教室が生徒達の会話で埋め尽くされる。

今日は始業式という事もあり、授業もなく午前中で学校は終了する。そこからくる開放感と、昼からなにをしようかという期待感が、この教室を騒がしくさせるためには十分すぎる燃料だった。

「それじゃあねーっ」

「おう、またなー」

学校公認で元気印を与えるべき栗崎は、終わったと同時にそれこそ脱兎の如く教室から消え去った。恐らくこのあと部活なのだろう。

「んああ…ようやく終わったかあ…!」

俺も背もたれに身を預け、大きく伸びをしてじっとしていて疼いていた身体に満足感を与える。

「よっしゃっ!学校終わってよっしゃっ!」

意味の分からないテンションに取り憑かれた俺の右隣にいる人は、何故かガッツポーズをしながら喜びを表している。

そしてそのテンションの捌け口が、達也の目が俺をとらえると共に向けられる。

「よ」

「断る」

「ま」

「断る」

……

「…ま」

「断る」

「せめて『まだ1文字しか喋ってないよ』って突っ込ませろや！」

「断る」

「お前はプログラムされた言葉が来ないと同じ言葉しか言えない動物ロボかつっ」

俺は信じられないくらい面倒臭そうな面を達也に見せつけながらこう答えた。

「なんだよ、俺に何か用なのか」

「きまつてんだろ！？もう学校は終わったんだ！僕らは学校をセカイとびだせるんだよ！」

「じゃあな」

ガタッ

今日貰ったプリントが数枚ある以外何も無い、すっきりした鞆を持ち上げて達也から背を向けて歩き出す。

「ちょ…ちょ待てよ！」

駆けて俺の前に立ち塞がり両手を水平に広げ『ここは通さないポーズ』になる。うっとおしい。

「あたしのお話を聞いてえ！」

悲劇のヒロインっぷりを演出する達也。

この目立つ行為に、まだクラスにごまんという生徒から「また達也か」「はじまったよ」と、口々にいわれる。

そう、達也は高校に入ったときからこんな奴であり、初見の人間がこいつを見るときまって「キモい」と言う。

だが本人は全く聞いていないというかもはや耳に届いてないらしく、良い意味で唯我独尊を貫いている。

どうしてこいつとこうしてつるんでいるかというのは、話せば長くなるので割愛する。

なんだかねで俺もこいつと付き合い初めて3年目になる。ということはこのこいつの性格が嫌でも分かる。

その経験からして、こうなってくると聞かないと力づくで通らなければならなくなる。そんな無駄な体力は使いたくないので大人しく従うことにする。

問題は従ったら従ったでSAN値がガリガリ削られるので、とつちもどつちという事だ。

「はあ…、なんだよ」

「そんなあからさまに溜息つかないでください」

ありもしないめがねを上げるような手つきをし、話を聞く気になつた俺に満足げな頷きをする。

そしてなにを思ったのかおもむろに俺に近づいてきた達也は、グーパン準備完了の俺の拳を解きほぐしたかと思えばそつと何かを握らせる。

少しひんやりとしたものを感じ、手を開いて確認すると、何故か鍵がそこにはあった。

視線を達也に戻すと、髪をかき分けてニヒルな笑顔でお出迎えして

くれた。

「コレ…僕の部屋の鍵だ。来る気があるならいつでm」

「ってちよちよちよちよちよっ！ごめんっ！それ俺の家の鍵だからっ！！投げないでっ！？」

…

俺が全力で4階の廊下の窓から人が豆粒に見える1階に投げ捨てようとした鍵を土下座4回してなんとか取り戻した達也は、抱きしめて歓迎した。

母親のお腹の中に男のプライドなど捨ててきた達也の目尻には、涙が溜まっていた。いや、そこまで喜ぶなよ。

「これが最後の問いだ。俺に何のようだ」

「わ、私はただ、一緒に帰ろうって、いいたかっただけなんですう」

頼むから最初からそう言ってくれよ…

俺は大げさに肩をすくめて鞆に鍵を突っ込んでいる達也にこう言った。

「それはいいが、俺は妹の所に行くから途中までな」

「義妹？」

冒頭で説明したとおり、俺には7つ下の妹がいる。

産まれたときからかなりの病弱で、人生の大半を病院で生活しているような状況だ。

退院しては入院しての繰り返しで、今のところ回復の見込みはない。

「そんなに早く死にたいのか」

軽く拳を振り上げると、テストで赤点が返ってきたときのような、目を丸くして絶望した顔をする。

「い、いや…お前と義妹の関係の中に俺が入ってきてNTRする…みたいな妄想をしていたんで、つい」

てへぺろ
ガッ

「あがつ?!だ、誰も『ぬるば』だなんていってないだろ!? 謝れよ!!--」

なにが『てへぺろ』だ。舌を出して片目ウインク、それに手を頭の後ろに回すというコンボを男がするだなんて、ガンジーさえ助走をつけて殴るレベルである。

これがまかり先生だったら、俺は逆に感謝してしまうことだろう。やはり世の中可愛い正義だな(キリッ)

「ごめん(棒)。じゃあな」

これ以上この馬鹿と関わっても仕方がないのでさっさと妹…明日香あすかの元へ向かうことにする。

「まったくもう、紅ちゃんっていつつも勝手なんだからっ」

『エロゲの幼なじみヒロインが言いそうな言葉ランキング』8位にランクインしそうな台詞を平然と言っただけから、追いかけてくる達也だった。

「…おい」

この場所独特の雑踏や店のおばちゃんのかたましい売り込みの音が俺の耳に否応なしには入りこんでくる。

「どつしたんだい？」

時刻は一時を少し過ぎたくらいだろうか。辺りを見渡せば、昼飯を食べに来たサラリーマンをチラホラ見かける。

「なぜお前がここにいるのだ」

…ここはこの街最大の商店街である深翁商店街。みおきな

うちの学校からゆつくり歩いたとしても20分程度あれば来ることが出来るため、学校帰り学生がよく遊びに来る場所だ。

商店街を抜ければ駅もあるということもあり、今の時代には珍しくかなり盛り上がっている（と思う）。

とはいえこの街には特に観光名所と呼ばれるところはないため、あくまで地元で盛り上がっている、という程度だ。

文房具屋にファミレス、小さいがスーパ―、ゲームセンターなど、普通の生活で不便を感じることはないくらいの充実っぷりなので、正直このままでいい気がする。

余談だが、一時期温泉ブームの影響で妹のいる隣町が大いに注目を浴び、空前絶後の観光客数を観測したことがある。

そのおこぼれというか、おかげでうちの街にも人が流れ込んできたものの、最近ではブームもすっかり下火になり、いつもの平穩さを

取り戻している。

そんな商店街の方向に達也の家は存在しない。ところがこいつは当たり前のように着いてきている。

この展開にデジャヴを感じたことがないと言えば嘘になる。まさか…

「まさか… また妹のところにくるつもりか？」

懐疑の念を抱きつつ、横目で質問すると、達也はいきなり腕を組んだかと思えばそっぽを向いてこう言い放った。

「べ、別にあんたの妹に会いたいだけなんだから。あんたと一緒にいたいわけじゃないんだから。勘違いしないでよねっ」

『エロゲのツンデレヒロインが言いそうな言葉ランキング』で永久不動の一位の座にある定型文をつかってくるんだからタチが悪い。

「だが断る」

いっても無駄だが、一応言っておく。

案の定、無駄だった。

「だが断る」

なぜか俺を見下ろすような目線になるうと必死になっている。

至極一般的なことではあるが、こんなことでこいつが引き下がる要素など微塵もない。全く困った奴だ。

… 実際来ても全然構わないが。

「ん？ どうしてアへ顔になるん？」

「あへえ」

「ちょおい！本当にすんなよ！？これ小説だからお前の顔見せずに済んだけど、漫画やアニメだったら完全に事故だぞ！？」

「ん、お、悪い悪い。」

顔をキリッとさせる。

さ、様式美は済んだことだしそろそろ行こうかな。

「お前に何言っても無意味なのは知っている。きたければ来ればいい」

そう言っただけ承諾すると

「ヒヤッハーツ！！」

今にも汚物を消毒しかねない悪人面で喜びを表現してやがる。

「だが、病院内では一言も喋るなよ。喋る毎に裏拳一発な」

「フツ、造作もない…え？」

計画通り

「よしいk」

「まー待て待て待て！！それじゃ俺行く意味なくね！？ただお前に黙ってついて行くだけだなんて俺はお前のスタンドかつっ！？」

「スタンド名は『ストロングエア空気の強者』だな」

「うわーっ！いろいろ矛盾しているじゃねーか！」

両手で頭をワシ掴みして悶える達也を無視して、俺は駅に歩き出した。

ガタンッ！！

「アガッ?!」

電車に揺られること二十分、俺達は明日香のいる隣町までやってきた。

その矢先、キップを入れたのに改札口は全力で達也の通行を阻止した。
機械にまで嫌われるだなんてなんて不幸な奴なんだ。

「ちよつと駅員さんっ!？」

そんな達也を視界から外し、俺は他の建物より一つ頭抜けたやけにでかい建造物に目を向ける。

それは大々的に『白』を強調したもので、他の景色から余りに異色なため嫌でも目立つ。言わずもがなではあるが、あれはこの町一番の総合病院。

ほかの建物が小さいというのものもあるが、巨大な三つの病棟を並べたそれは巨大な城を思わせる。建物の色が白だけに。

殆どの専門家が集結しており、困ったらとりあえず駆け込めと言われるほどの汎用性がある。

そんな病院にうちの妹は長期に渡って入院している。逆を言えばそんな病院ですらも明日香の病気を治すことができないのだ。

「つたく、酷い目にあっただぜ…」

後ろを振り向けば、ようやく解放されてやれやれ顔で戻ってきた達

也の姿があつた。

「ほら、行くぞ」

「ちよ…ちよつと待ちなさいよっ」

…

「…しかし、何度来てもここはすげえって思つちまうな」

そう言いつつ、半分にやけ口で目を見開かせる達也。

こいつにしては珍しくまともな感想を述べる。ネジが五本はずれた達也でさえもそう言わせる程この病院は圧巻なのだ。

病院の入り口、ここをひとたび入れれば殆どの病気が治療できる正に『天国への扉』^{ヘブンズドア}といつても過言ではない。

そんな病院を目の前にし、感嘆に浸るこいつに今から残酷な宣告をしなければならぬと重うと気が重く…なるはずない。

「さ、こつから先はお前は絶対に無言だからな」

サラッとそういつてやると出目金と勘違いしてしまうほど開眼させ、にやけた口は一瞬でへの字に変わる。

「あれ冗談じゃないの！？救いの手はないんですかっ！？」

両手の指をわさわさしながら抗議を申し立ててくる被告人に裁判長は冷徹な判決を言い渡す。

「ねーよ」

もつと面倒な事を言い出すかと思ったが、意外にも達也は突然ない頭で思慮深くなる。

自分の中で何かを納得した達也は頷き、こう言った。

「……フツ、まあいい」

こう変なときにギアチェンジが早いこいつは、気障に含み笑いをしながらこう言った。

「たとえ俺が一言も喋らなくても、明日香ちゃんは俺の魅力の虜になる…そうだろう?」

このドヤ顔につい棒を付けて薔薇を添えたくなるが、そんなものを世に出したら叩き潰されるのは火を見るより明らかである。

「ああそうだな、じゃあいこう(棒)」

自動ドアを二枚隔てて、中に入る。

それとほぼ同時にあの病院の独特のにおいが鼻につく。

中にはチラホラ人が各々の目的で動いており、受付で待っている人、カルテを持って歩くナースなど様々だ。

見慣れた光景なので、俺は妹の部屋に向かうことにする。

「…」

チラツと後ろを見れば、作り笑いを浮かべた達也がちゃんとついてきていた。

さて、いつまでそれが続くことやら…

正面を向き直し、入り口から右手にあるエレベーターのボタンを押

す。

「あら辻村君、こんにちは」

10数秒後、チーンとエレベーターが出迎えの挨拶をしてきたとほぼ同時に、後ろから柔らかい優しい声が俺に向けられている。

栗崎の時と同様、この声は俺の脳が知り合いだと認識している。だが栗崎と違い、完全に確証があるため、確認もせずに挨拶を返す。

「こんにちは」

振り向けば、そこには妹を担当している白い白衣を身にまとった看護師さんが立っていた。

手にはカルテを持っており、今まで誰かの部屋にいつていたのだろうかと適当に推測する。

「今日は妹のお見舞いかな？いつもありがとうね」

天使の微笑みとはこのことだと教えてくれる笑みに加え、若い看護師さんのスタイルは絵に描いたような理想的なもの。なんだ、ゲームのキャラか。

「!？」

看護師さんも大好きな達也の口は閉じられず、だがすっかりいやらしい視線を看護師に突き刺す。ぬかりない奴だ。

「いえ、兄として当然のことをしているだけですから」

その視線をなるべく悟られないよう俺は看護婦に話題を振ってみる。

「えらいわねえ。今時の高校生からそう出る言葉じゃないわ。いいお兄さんね」

「いや、心配いらなかったか。看護師さんは達也など眼中になかったようだ。…そもそも達也がちゃんと見えているのだろうか。」

「い、いえ…」

「さあ、はやく合つてあげて。妹さん寂しがっていたわよ？」

なにかを思い出したらしい看護師さんは、軽く笑いながら胸元で人差し指を天井に向ける。

「本当ですか？」

「フフ、毎日来ない限り、その寂しさは紛らわすことはできないと思うけど」

「…わかりました。それでは急いで行ってきます」

感謝の意を込めて頭を下げ、エレベーターを待つ時間も惜しいので、小走りで妹の元へ。

「病院内は走っちゃ駄目よ」

苦笑混じりの看護師の声が後ろから聞こえた。

ガラッ

「あっ！お兄！」

俺（と ストロングエア 空気な強者）が入るなり、目を輝かせて俺（達）を迎え入

れてくれた。

窓際によく洗濯された真っ白いシーツや布団に身を包んだベットがあり、明日香はその上で半身を起こしていた。

部屋はシンプルな立方体構造で、壁や天井、床の色も白に統一されており、どこか異空間に来てしまったのかと錯覚する。

…いや、この表現はあながち間違っていないのかもしれない。

「お兄が来てくれたーっ」

高校ではまず聞くことはない年相応の幼い声は、俺の耳には新鮮だ。オ プーナの頭をモチーフにした帽子を深々と被り、水玉のパジャマという、つい後ろの奴が鼻息を荒げる格好だ。聞き耳を立てれば…ほらっ！

「フン…フン…フン…」

既に顔を赤くして、鼻息を漏らさずにはいられなくなっている。

無理もない、ただでさえやばいのに、そこに『病弱な娘が白いベツトの上で見てくる』という属性攻撃が付和ロコンされるわけだから。

ご覧の通り、明日香の格好は幼児異常嗜好をオーバーキルで悩殺するには十分すぎたようだ。

これで確信する。こいつの目的は明日香を視姦するためであって、決して見舞いに来たわけではないと。

全く、こいつの H E N T A I の万能っぷりには感服してしまう。それをもっと他のことに生かして欲しいものだ。

「久し振りだな、明日香」

興奮することしかできない人形に変わった達也を無視して、軽く手を挙げて挨拶する。

「もーっ、くるのが遅いよっ」

言葉は不満げだが、その顔は白い歯をくつきり見せながら笑っている。

「ブホッアアアアアッ」

鬼に金棒なその無垢な笑顔に、スタン達也は今にも白目を剥いて失神しそうだから危なっかしい。

…しかし明日香はどうして達也に対して何も言わないんだ…？

「いや、ごめんごめんそんなに怒らないでくれ」

歩みながら謝る。

「週一回しかこないお兄が悪いのっ」

「ゴパッ」

顔を頬に食べ物を詰めたりスのように膨らませる。これ以上スタンドをいじめないでやってくれ。

明日香の言うとおり、俺は週一回しか妹の病院に行っていない…正確には行けない…だ。

もっと合ってやりたいのはやまやまだが、平常時は、学校が終わって急いで病院に向かってもそのころには面会の時間が終わってしまったっている。

そのため平日はどうしても合うことが出来ない。

だから俺は土日のいずれかを、妹に会う日になっている。

今日は午前中に終わったため、例外だということだ。

俺はベットの近くにある質素な簡易イスに腰を下ろして聞く体勢を

取る。

「僕、お兄が来るのをずっと待っていたんだよ？」

小首をかしげてねだるような目を向けてくる。

「カハツ…ハア…ハア…」

ストロングエア

空気の強者、もういい…！もう…休めっ…！

「本当にごめんな、あまり合いに行けなくて」

家族だというのに、まだこんなに幼いのに、週一回しか会うことができないだなんておかしな話である。

「いいんだよ。会いに来れなくても。だってお兄は高校生だもんね。だって高校生はいろいろ忙しいんでしょ？」

明日香のそんな言葉に、俺は胸が締め付けられる思いがした。こんな小さな妹に気を遣われる俺はなんて不甲斐ないんだ。

「ま、まあな。…でもな！」

なんとかして明日香を安心させたいがために、つい勢いよく言い出してしまった。

こんな何もできない自分に言い聞かせるように。言い訳するように俺は笑顔の仮面に隠れた明日香に向かってこう言った。

「今日で三年生になった。高校生なのは今年までだ。大学生になったら…もっと会いに来る。絶対に」

これが俺の今できる精一杯の言葉。

「んふ」

困惑する俺とは対照的に、明日香は口元に手を当てて小さく笑った。

「そうかなあ？彼女とか出来て、僕にかまっていられなくなるんじゃないかなあ？」

白い歯を見せながら、ジト目で悪戯っぽい笑みをこぼす。

「そ…そんなこと」

「いいんだよ。僕は…」

余りに儂い、今にも崩れ落ちていきそうな小さな手が眼前まで上げられ、制される。

フツとその表情は崩れ、どこか遠い目をしながら風が良く通っている窓の外を一瞥したかと思えば、再び俺に視線を落ち着かせる。

そして手の下に隠れてしまったが、そこには仮面を剥いだ本当のほえみを垣間見せた明日香から、トドメの一言を言われる。

「僕は…僕ができなかった事を、お兄にたくさんしてほしいからね」

！！

生まれて2、3年たった頃からこの病が発症し、この生活が始まった明日香。

外の世界を殆ど知らず、病院という独房の中でずっと病の回復を望んでいる。

俺はそんな明日香を何度連れ出して、いろんな所を見て回りたいと

渴望したことが。

でも、それは今になっても叶わない。いくら願ったところで、神は明日香に外を出ることを許さない。

だからって、そんな言葉は言って欲しくなかった。

明日香…お前は…

「オツ…ウツ…ウツ…オウ…ブヒツ…」

!?!?………

…

今の馬鹿の漏らした声のせいで、一気にこみ上げてきていたものが一目散に退散していく。

大半の人間から憎まれている芸能人が涙の引退会見しているときに「やっと消えてくれるんですかwww」と言い出す位空気が読めていない。

…とは言え、良くも悪くも雰囲気殺しなこいつのおかげで、助かった一面もある。

ここで弱気になってしまっただけは、それこそ明日香の気持ちが無駄になっってしまうからだ。

俺はくじけてはいけない。それが明日香のためであるから。

そう言う意味で達也に救済された。だが…

「ブベツ?!?!?」

後ろで不快な環境音はないきを垂れ流すスピーカーに明日香に視線を固定しながら一撃裏拳をかます。一度殴っておかなきゃ気が済まない。

「ヒツヒツ!!!フーツ!ヒツヒツフー!!」

何故かラマーズ法で転げ回る達也は放っておいて、改めて明日香を

見る。

そつだよ紅、俺は明日香の兄として、その役割を演じ続けなければならぬ。

一度深呼吸して、完全に気持ちを落ち着かせてから、口を開く。

「明日香：僕ができなかった事、だなんて言わないでくれ。絶対に病気は治るから。もう少しの辛抱だ。な？」

根拠のない台詞。そう誰もが思うが、それに縋ることしかできないことくらい、わかるだろ？

その一言に少し表情を明るい方向に引き戻してくれた明日香は、真意が読めない笑顔でこういった。

「うんつ。でも僕の分じゃなくても彼女は作つてよね。お兄は優しいし、カツコイイんだから、もつたいないよ」

「そ、そんなこと……」

「あーっ、お兄顔真つ赤つかだよ？んふふーそんなに言われて嬉しかった？」

愉快的様子で『mg』を真つ赤になっているらしい俺の顔に突き刺す。

「おま…お、お兄ちゃんをからかったのかっ!？」

「もー、お兄は女の子の言葉に弱いんだからあ。僕みたいな小学生から言われてもそんなに真つ赤にしているようじゃ、」

同い年に言われたらコロッといつうちゃうんじゃない?うふ」

明日香の周りに『ニヤニヤ』が取り巻いている。くそっ謀られたっ。

かと思いきや何かを悟ったようにハツとする。コロコロ表情が変わる奴だ。

「あ、まさか僕みたいなお子供から言われたから？えっ、お兄ってまさか…」

「俺はロリコンじゃあなあああいいい！」

全身全霊で明日香の狂言を全否定する。これだけは譲れないくるったものいい

「うふふ 冗談だよ 冗談」

からかいが大成功したため、非常に満足げな顔つきでうんうん頷く。全く、どこからそんな偏った知識を携えたんだ。

どうやらってかやはり俺は明日香のその手のひらで踊らされている道化のようだ。

さっき兄として役割を演じなければならぬって言った奴は何処のどいつだよ…。

「く…勘弁してくれよ」

適当に体裁を戻しつつ、妙な汗をかいてしまったためポケットに手を突っ込んだそのとき

ポン

…と俺の左肩に手が置かれる。この状況下でこんなことをする奴は一人しかいないわけで。

俺はもう立ち直れたのかと思いつつ後ろを振り返ると

「…」

君も幼女ロリコン異常嗜好かい？ と言いたげな、口元を片方だけつり上げ、

どこか蔑むような目で見られていた。うるさい氏ね。

「んふふふ、やっぱりお兄をいじるのは絵の色塗りなんて霞んで見えるほど面白いなあ。うふ」

『絵』という単語を聞いた途端、壁際に置かれたスケッチブックが無性に存在を強調してきた。これは使える。

「そっいや、絵の方はどうだ？」

これ以上妹のペースに持って行かれるのも癪だし、ロリコン疑惑を引きずってもらいたくないので、微妙に話題を逸らす。

案の定、好きな話題なので飢えた魚のように生きよくガツツリ食いついてきた。

「ん？これのこと？」

明日香が自分の体を覆ってしまうほどのスケッチブックを取り出す。それをペラペラとめくり、自分の過去の作品を鑑賞しながら溜息混じりにこう言った。

「身近なものを描くのは飽きちゃったから、今外の景色を描きたいと思っっているんだ」

その言葉がグサリと心に突き刺さったが、平静を装いつつ言葉を続ける。

「そうか、ならここから見える景色を描いてみるよ」

「ううん…」

明日香が何度も何度も掴み、表紙にシワが目立つスケッチブックを撫でながら唸る。

俺が明日香にスケッチブックと絵の具セットを買ったのは2年前だ。その頃毎日暇だ暇だと言ってやまない明日香のためになにか遊べるものを色々買いつけていたが、全部駄目だった。

そんなある日、それらを買ってくる、今までゲームや本には全く興味を示さなかった妹が、なにかに取り憑かれたように熱中し始めたのだ。

その上達振りには目を見張るものがあり、驚異的なスピードで描けば描くほどうまくなっていた。

年齢で言えば妹は11歳だが、その上達の早さで、もはや彼女の手から描かれた絵はコンクールの賞を貰える高校生と引けをとらない。それは『自分の家族』という色眼鏡の補正がかかっているからなのかもしれない。が、ハッキリ言おう、これだけはそうでないと太鼓判が押せる。

「この景色なら、ここから動かずに書けるぞ」

俺は開け放たれた窓の先にある、青空が続く外へ指先を向ける。外には特に何もないので、静まりかえった陸上競技場が見える。

「それだけじゃつまらないなあ…ううん…ちょっと考えておくれよ」

このレベルになるとこだわりというものがあるのだろう。特に俺は強要するようなことはしなかった。

「あ、それでね、お兄…」

…そんな感じで、しばらく明日香と会話を続けたのであった。

…
気づけば外は赤一色に染められていた。世間的に言えば『夕方』と呼ばれる時間だ。

夕日が病室にも差し込まれ、白メインのこの部屋には夕日が彩ったものはイレギュラー以外の何者でもなかった。

それに気付いた明日香は会話を中断して、少々驚いた顔を浮かべつつこう言った。

「あわ、お兄、もうこんなに時間が過ぎちゃったよ？帰らなくても良いの？」

「別にこれくらい良いさ。それよりお前と話がしたい」

明日香の慌てを鎮火させるように言ったが、それでも炎は燃え続けるようで、開いた手を突き出す。

そのか細い腕には何カ所も点滴の管が痛々しくぶら下がっている。

「いいよ。お兄といっぱい話してきたし。お兄には宿題もあるでしょ？」

ない…と言う隙もないほど明日香は言葉を止まらない。

「それに僕は一人でも寂しくないからね。もう11の強い女の子なんだから、お兄はなにも心配しなくていいんだよ」

矢継ぎ早にそう言った。

…ここは明日香の気持ちを汲んでおとなしく下がった方が良かったらう。

「わかった。それじゃあ、またな」

上げたくない重い腰を上げ、妹に別れの言葉を言う。

「うふ、この右腕が筆を動かせ続けられる限り、僕に暇はないよ」

力こぶに反対側の手を当てながら、努めて明るい声でそう答えてくれた。

明日香に手を振り、病室を後にした。

…明日香…

廊下を出たと同時に、後悔の念が津波のように押し寄せてくる。

無意識にも右手の拳に力がある。

『いいんだよ。会いに来れなくても。だってお兄は高校生だもんね』
『それに僕は一人でも寂しくないからね。もう11の強い女の子なんだから』

…あの言葉は全て嘘だっていうのは明白だ。わかりやすすぎる程に。家族に気を遣う必要なんて微塵もない、なのにどうして明日香はこんなにも俺に気を遣ってくれるんだ。

寂しいなら寂しいと言って欲しい。見舞いに来れる俺をもっと頼って欲しい。

しかしその疑問を明日香に問い出すことは俺にはできない。聞き出せば、この関係が崩れ去ってしまいそうだから。

それが怖かった。

「…くそ」

やり場のない虚無感をこらえつつ、俺（達）は廊下を歩く。

廊下には人という人がおらず、薄暗く続く道が俺の気持ちを再現し

てくれているようだった。

そのせいかいつもより周りの音に敏感になっており、病院内の静かなざわめきが良く聞こえる。

その中に…

「…!…!」

俺の視界に入る、ここから2つ先の扉の中から、やたらでかい声で喚いている奴がいる。どうかしたのだろうか。

そのの前まで来ると、扉越しから声が聞こえる。なにかを主張しているようだ

「い…よ…!」

…まあこれ以上聞いていても無駄だし申し訳ないのでとっとと行くことにする。

「だあああああああああああ!…!やーっとお!!
しゃべれたあああああああ!…!」

「うるせえ」

ガツ

（フンスドア）

天国への扉から下界にでた瞬間、本当に病院内では何もしゃべらなかつた達也が、その鬱憤を晴らすが如く怒涛の叫びを腹から出した。

しかしいくら病院外とはいえ、入り口の目の前だ。非常に迷惑なので頭にチョップして、黙らせる。

「あがつ?!だ、誰も『ぬるば』だn(ry)」
「いや、まあ、お前は良くやったよ。今回だけは賞賛に値する」

病院の敷地内を二人で歩きながらそう言って達也の苦勞を労う。今日は割と本気で労う。

「フツ、俺にかかればこのくらい造作もない…だが…」

今だから許されるキザな髪のかきわけをする達也であったが、直ぐに額にしわを寄せ困り顔になり、急かすように聞いてきた。その姿は、神に助けを請う迷える子羊そのものであった。

「…でもさ、どうして明日香ちゃんは俺の事について触れてくれなかったんだろう…」

確かに。としか言いようがない質問である。敢えて仮説を立てるとすれば…2つ思いつく。

俺という神に縋っている修道士に、2つの解を示してみる。

「そうだな…、達也の存在が視界に収まらなくなるくらい俺しか見えなかった…か」

「達也のあまりの存在感のなさに、そもそも見えなかった…かだ」
指を1つ1つ折りながらそう答える。

「つまり前者だろうが後者だろうが、お前は見えていなかったんだな」

「ストロングエア 空気な強者」の力をいかに発揮したんですね、わかります…って」

「そんな才チありかよおおおおおおおおおおお！！！！」

…この話にも才チがついたところで、今日は終わりにしておこうか。
綺麗に染まった茜雲を堪能しながら家に帰ったのだった。

4月3日(後) (後書き)

と言うわけで一日目は終了です。

妹の存在は正直この黒羽ルートでは関係ありませんが、共通ルート
なのではいつています。

さて、二日目は学校の女の子達との会話が多くなります。
ギャルゲーらしい展開はあんまり無いかもしれませんが、お付き合い
をお願いします。

それではここまで読んで下さり、ありがとうございました。

4月4日/火曜日(前) (前書き)

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きを読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで二回目です。さあメインヒロイン黒羽ちゃんの登場です。

正直この子を可愛く書く自信はないのですが、できるだけ頑張ってみます。

ではどござー！

4月4日／火曜日（前）

ジリリイリリリ

なにかが鳴っている。

それが目覚まし時計だと認識できるわけもなく、思考が完全に停止している俺にとって目覚まし音など意識の中の一部に過ぎない。

ジリリイリリリ

けたたましいベル音は、俺の『覚醒』を突き破るまでまで掘り進むドリルの削岩音のようで、少しずつその音が大きくなる。

ジリリイリリリ

「……………うん…」

ようやく目覚ましの生音まで聞こえるくらい意識を取り戻した俺は右手を頭より高く上げ、音の出所を遮断すべく、それにむかって手を上げ下げする

じりーガチンツ！？

半ば無理矢理止める。っていうか今のはスイッチを押しただんじやなくて、目覚ましを叩きつけて電池をぶっ放しただけなのかもしれない。

もし後者ならば時間^とを止めてしまい時刻を観測できなくなった時計など、置物以外の価値が無くなってしまふ。

それを確認する意味でも、時間を確認する意味でも、俺は未だに睡眠へと手ぐすねを引いている睡魔を振り抜き、時計へと視線を移動させる。

…
残念ながら寝起きの目は目としての機能をはたしてくれず、その視界は歪曲^{ゆが}み、焦点が安定しない。

目をこする。すると少し緩和したぼやけた視界の中でなんとか時計の針を確認できた。

時計は…6時…43分…を指していた。

途端にせつせと時を刻み続けることを証明する稼働音が耳の鼓膜を震わせ、時計がちゃんと動いていることが確認できた。

その謎の安心感から、一気に眠気が押し寄せてきたが、今二度寝したら次目が覚めたときは今の目覚めとは比べものにならないくらいアクティブなものになるだろう。

朝っぱらからそんな誰も得しない焦りや緊張感を味わいたくもないので、さっさと起きることにしよう。

確かに二度寝したときの気持ちよさは格別だが、寝過ぎたときの絶望感もまた格別である。『ハイリスクハイリターン』を気軽に味わえる手段が『平日の二度寝』だと個人的に思う。

だが、確実に起こしてくれる『親』という存在があればそんなこと…ないものねだりをしてしまうのがない…か。

迅速に気持ちが悪えた俺は、常時でたままの布団から身を引き出したのだった。

「いただきます」

無論、この言葉に反応してくれる人間は存在しない。

この部屋に音があるといえば、一方的に喋っているテレビの中にいるニュースキャスターくらいなもの。

なんの躊躇もなく使う人数と数が食い違っている箸が積んである筒に手を伸ばし、朝食をスタートさせる。

いや、食い違つてはいなかった。いつからだろうか、こんなにも箸が余るようになったのは。

俺はもくもくと箸を進めて、今朝炊いた白飯を頬張り、昨日帰りにスーパーに寄ったとき特売されていたウインナーをかじる。

その瞬間肉汁があふれ出す。悪くない味だ。

こんな風に一人で朝食：あまつさえ夕食までだが、こんな生活が始まってもう10年がすぎようとしている。

明日香は小さい頃から入院しているのでノーカウントだが、問題は父のほうだ。

自分が小学生にあがってからというもの、弁護士として腕を振るっている父は不自然に仕事に打ち込み始めた。

その頃から仕事が軌道に乗り始めていたと言えばそうだが、その転機の前と後では雲泥の差で態度が変わった。

そう、人が変わったかのように。

待てど暮らせど夜は帰ってこないことが当たり前。たまに帰ってきたかと思えば、次の日には逃げるように仕事へ行く。

以前はなにかお祝い事や行事の時は無理をしても帰ってきてくれた父だが、その見る影も消え失せた。

考えるのも嫌になってくる。俺はコップに半分ほど注がれた100%オレンジジュースを流し込み、溜息を漏れ出す。

…とにかく父は、10年前から俺達家族に対して父親らしいことをしたことがない。

なぜ父がこうなってしまったのか、心当たりがないわけではない。人間大きな出来事でもない限り、そう簡単に変われはしない。

その心当たりとは、同じく10年前に母が亡くなった事：だろうか。父から病気で死んだと伝えられた。確かにその節がなかったとは言えなくはない。しかし、あまりに突然だった。母には失礼だが、滑稽なほどに。

そこを考慮すると、今の父は最愛の妻を失った悲しみを仕事で紛らわそうとしている…：そう解釈することはできる。

肉親の、自分の妻の死は確かに想像の域を出ることはないが、それは鬼すらも涙を流してしまうほど哀しい出来事だと思う。

だが、もうあれから長い年月がたってしまっているし、この180度回転した態度の変容は、それだけが原因だとは到底思えないのだ。弁護士を務められるほどの精神の持ち主が、妻の死を乗り越えられないとは考えにくい。

別に父が母を愛していなかったと言いたいわけではない。おかしいのだ。

父は俺達に何かを隠している。そんな気がして止まないのだ。

「はあ……」

また深い溜息を一つ。こんな考察、何十回と繰り返してきた。だが結局は『わからない』で俺の頭の中は収束してしまう。

いつの間にか食べられるものはすっかり無くなっており、眼前に映るものは開いた容器達だけだ。

朝食を食べ終わるということは、ここにいる意味もなくなると同義であり、俺には学校に行く以外の選択肢が無くなる。

茶碗を水につけ、俺は学校へ向かうことにした。

丁度天気予報をやっていたテレビからは、若いお天気キャスターが指さし棒で温暖低気圧に円を描いて今後の天気を占っていた。

俺の地域も暫くは晴れらしい。それが分かっただけでもテレビを付けた甲斐があったってものだ。

安心してテレビを消し、鞆を取る。

「いってきます」

誰の見送りもない玄関から、俺は外の世界へ出た。

雀のちゅんちゅん鳴く声をBGMに、通学路を歩く。

お天気キャスターの予報通り綺麗な青空が、すがすがしい朝をこれでもかと体現してくれている。

登校時間はまばらではあるが、平均して他の連中が学校に登校するには少し早い時間か。

俺と同じ通学路を利用する生徒は、周りを見渡しても数えるほどしか見えない。

うちの学校は家から歩いて20分もかからずにいけるといふなんともありがたい距離だ。

俺は自分の不安定な気持ち落ち着かせる意味でも、ゆっくり周りの景色を見渡しながら歩いた。

学校まであと一直線でつくところまで来た。

例年通り、この道には桜が美しく咲いており、ついつい目が奪われる。

この学校をつなぐ直線の道の両サイドには桜の木が等間隔で並べられており、それは校門まで続いている。

毎年春になると桜は一斉に満開になり、この味気ない道に言葉通り花を添えてくれる。

お花見には絶好のスポットでもあるため、実際に花見シーズンになると花見の客でいっぱいになり、今年も例外なくそうなるだろう。

この通学路を通るのも今年が最後…か。

俺はそんなことを思いつつ道の真ん中を悠々と歩く。

「…ん」

前方にどこか見覚えのある女の子がいることに気がつく。

道の先からでもハッキリと確認することができるその磨き上げられた黒髪。それを惜しみもなくツインテールにしている。

それは昨日こそ左右に揺れて俺の目の前から遠ざかっていたが、今日はその重力に従って大人しくぶら下がっているし、しっかりと捕らえることができる。

もう少し近づいてみる。いや、近づくほどでもないか。

彼女は昨日ハンカチを拾ってくれた女の子以外何者でもないではないか。

さっきまで桜に釘付けだった俺の目は完全にターゲットを彼女に変更させ、食い入るようになってしまった。

：いやいや、見てるだけでは駄目ではないか、紅。

昨日のお礼をもう一回述べるべきではないか、紅。

そう決めた俺は、少し足をはやめて女の子に近づく。

女の子は全く気付く様子もなく、俺は容易に彼女の真後ろまで接近することに成功する。

：さて、ここは明るめの挨拶でいってみよう。

昨日俺が妄想を加速させすぎたあまり不審者のような顔になり、彼女には変な印象を植え付けてしまった。

それを払拭するタオルになるような、真っ直ぐな青年という設定で挨拶をして、彼女の不本意な印象をねじ曲げなければ。

意を決して挨拶と同時に横に並ぶように歩く。

「よっ、おはよう」

勿論作り笑^{えがお}いを忘れずに、先輩が後輩へあいさつするような、気軽な挨拶を試してみる。

「え？あ？はい？？」

いきなり声を掛けられて驚いたらしい彼女は、素っ頓狂な声をあげてツインテールが揺れてしまう程の速さで声の主へ振り向く。

こうしてよく見ると、女子生徒の身長は俺の胸あたりまでしかなか

った。150を少し超えたくらいだろうか。

漆黒に染まった黒髪から、なんだよこれえ!?!といたくなるような甘い香りに少しドキツとするが、辛うじて平静を保ちながらお礼を言う

「え? ああ、脅かしてごめん、昨日ハンカチを拾ってもらったものだよ」

…と追加説明をしておく。

「あ…ああ」

達也のギャグを俺が受け流すときに出てくるような、かなり微妙な反応をありがとう。

脂汗がでてきたいと必死で主張してきている顔から無理に片目ウインクを作り、てへぺろポーズをする。

こんな見てられない俺をはやくガンジーが助走を付けて殴ってくれないだろうか。

「いやー、ちゃんとお礼ができなかったからさ、ちゃんと言っておこうと思っただね。昨日ハンカチ拾ってくれてありがとう」

その言葉に一切の感情を起伏させなかった彼女は、一応俺を見ながらこう言った。

「え? あ。全然、気にしなくていいです…では…」

そう言うなりそそくさと立ち去ろうと、彼女は足早に俺の隣から離れる。

「あ、ちょよ、ちょっと待ってよっ」

俺は少しスキップ気味で女の子に近寄り、再び隣に着く。なんてアケティブなストーカーだろうか。横顔からは彼女の心情はわからないが、嫌な顔をされただけまじなのだろう。

「ふう、せめて名前くらい教えてくれよ」

「いえ、本当にいいですから…」

ちらつと俺を見るなり俯き気味に彼女はそう答える。俺は完全に嫌われているのだろうか。しかし、ここで食い下がる俺ではない。

「いやいや、助けてもらった人の名前を知らないだなんて、俺の気が済まないってか、失礼だよ」

「そうですか…でも…」

しばしの沈黙

…なんだよこの空気は…

まさかここまで彼女に悪い印象を持たせてしまっていたとは…

そんな俺を嫌っている(？)らしい張本人から、息を呑むような音が気がした。そして

「くっ…きゅ…」

蚊が鳴くような声で言う。

「え？もう一度言ってくれない？」

マイク越しの音を拾えなかったシー マンのようにもう一度聞き返す。…『』がまるで機能しないな、この作品。

「…」

まるで合格者を発表している掲示板の前で緊張している女子高校生のような、右手の拳を胸に当てて目をつぶってつらそうな顔をしている。

すると意を決したのか、可愛らしいお口に空気が吸い込まれ

「黒羽…雪見…（くろは ゆきみ）です。」

地獄耳でも聞き取れるかわからない声でそういったが、何とか聞き取る。

くろはゆきみ…漢字はわからないが、可愛い名前であることは確かだ。

「くろはゆきみ…ね。俺の名前は 辻村紅だ。昨日は本当にアリガトな」

「あ、はい…。よろしくお願いします。では…」

よっぽど俺という人間に全く興味がないのか、流れるようにそう言っつてすつと俺の前を横切り、先に行く。

とにかく俺と話すのが嫌みたいだ。

正直に言おう、ショックだ。

…いや、人見知りなのだろう…とついつい好意的な解釈をしてしまっう。

「ああ…行っちゃった。…俺ってkブホヘア?!?!?」

突然目から火花が散る。明らかにグーパンで殴られたようで、俺は為す術もなく片手を着いて倒れる。いきなりすぎる出来事に事態をうまくまとめることができないが、誰かに殴られたという事だけはハッキリしている。

「この…」

殴り主を確認するため怒りを顔に出しながら首を振る。すると…

「フッ」

そこにはドヤ顔で俺を見下している、助走を付けて殴ったガンジーならぬタツヤーがそこにいた。珍しく早起きしてきている。

「殴って欲しかったんだろ…？お前の望みは叶えた。」

漫画の序盤で出てくる魔神のような台詞を吐いた達也のスネに遠慮無い蹴りをぶちかます。

「アゲーーっつ！！？な、な、ななにすんだおめえ！？」

容赦ない激痛に耐えきれなかった達也は両手で蹴られたスネを押さえながら涙目で睨んでくる。

「うるせえ、お前に殴られる義理なんかねえってことだよ」

立ち上がり、砂が着いたズボンを払いながら今度は俺が達也を見下しながら言い放つ。

「イチチチチ…、しかし朝からナンパとは、盛んだねえ、ねえねえ」
「見ていたのか…」

なにも一番見られたくない奴に見られてしまった。これは面倒なことになってきた。

一体こいつはどこから聞いていたというのだろうか。
少し声のトーンを落として、やや脅迫気味に聞いてみる。

「…お前いつからいた」

すると、んー…と表情を吟味し、片方だけ唇をつり上げ、目元で笑ってこう言ってきた。

「そう、お前があの子の名前を聞き出していた所辺りかな。でも軽く流されてたな？」

何故か勝ち誇った様な声で言ってくる。こいつに何か言われると、何より腹が立つ。

「…」

「あの子結構可愛いねえ。ちょっと暗いけどなあ。ヤンデレ属性持ちと見た。んーおまえも見る目があるな」

冷静にキャラ設定を解説してくる。

二次元の女の子の設定を現実の女の子に当てはめようとしている辺り、終わってらっしゃるエロゲ脳の持ち主だ。

「ちげえよ。昨日ハンカチを拾ってもらって、それのお礼を言っただけだよ」

このまま勘違いされっぱなしなのは癪なので、端的に彼女との関係を述べておく。

「ふーん？なのに名前まで聞き出すなんて、意味深だなあ…」

達也がにやにやしながらかっこつちを見ている。

「先行くぞ」

これ以上付き合ってもらえないので達也が視界に入らない方である学校へ向かう。

「まあ…そうだよな。俺たち三年なんだし彼女がほしくなるのも当然かうむだが紅お前はあまりにも恋愛経験が浅すぎる今のままではきつと焦りが生じて失敗してしまうだろうさっきの彼女との会話が何よりも証拠だお前は選択肢をまちがってえらんでいるこのままではバットエンドかノーマルエンドに終始してしまうそれはゆうじんとしてはとても哀しいことだそこでだ紅この何百人と女の子を後略してきたミスターオンナノコマスター達也にまかせれb…」

上の文は読まなくて良いです。

「っておい！！人の話をきけよお！！！！」

せめて句読点くらいつけろよ…

念仏のようにぶつぶつ言っていた達也が後ろから追いかけてくるのを無視して、教室へ向かった。

「…くはあ…」

「くはあ…」

だったらなんだっていうんだよ

ご丁寧に4階にある我が教室を目指してようやく階段を上りきる。

昔は4階から毎日好きなときに外の景色を見られる三年生を少し羨ましく思った。そんな時期が、俺にもありました。

ガラッ

扉を開けると生徒で埋め尽くされたときの独特な空気感はそのこにはなく、朝の気持ちよい風がほどよく通る余裕がある程度の集まり具合だった。

まだ始業のベルがなるまで時間があり、朝早くから登校してきている生徒達は席を離れて談笑している。

「みなさんおはようすう」

「……おはよう」

そんなさわやかさをぶち殺す達也君の元気な挨拶で、クラス全体が一つになって苦笑いを浮かべたのを俺は見逃さなかった。

まばらな挨拶が終わったところだし……さて、俺の席はここだったか。なかなか良いポジションである窓側に近い席に座り、一呼吸置いた後、まだ種類の少ない教科書類を出す。

「すごい一体感を感じる。今までにない何か熱い一体感を。風……
なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、俺たちのほうに」

そう言うて達也は鞆を席に放り投げて飛び出したつきりであるが。こうなると格好の暇つぶしがどこかに行ってしまう、やる事が無くなる。

パーフェクトスマイルマスター栗崎も鞆はあるものの、肝心の栗崎自身がいないので何の意味もない。

『暇』の一文が俺の思考を瞬く間に占拠していく。

無駄な抵抗はせず、さつさと折れて暇に従い寝ておこうか…ん？
伏せようとした目を、俺は伏せることができなかった。

つい10分ちよつと前に見たばかりの既視感たっぷりな後ろ姿が、
教室の隅でちよこんと座っているのだから。

黒羽…！？まさか一緒のクラスだったのか！？

逆にどうして気付かなかったんだと昨日の自分を殴って欲しい。勿
論ガンジーさんが。

…そうか、昨日は全く周りを意識していなかった応酬に、黒羽とい
う存在を知らせてくれなかったのか。

いやまあ、これはチャンスというものだ。

もっかい挨拶してみよう。

…という理性が働くが、反対にまたあしらわれるからやめたほうが
いいという理性も働き、正直迷う。

これが俗に言う『優柔不断』といわれるものだな。…ん、うまいル
ビが振られているじゃないか。

まあ、優柔不断が、優柔不断なりに答えを出させて貰うと、挨拶を
しようと思う。

どうせ嫌でも一年間一緒なわけだし、折角なにかの縁だ。

俺はその腰を上げ立ち上がり、例の美少女に近づく。

教室に通り返ける春風か、妙に俺の肌にまとわりついてくるような
感触を受ける。

彼女の丁度斜め後ろに着き、できるだけ偶然を装いながら一歩踏み
出して話しかけてみる。

「おはよう、またあつたね」

爽やか笑顔とセットで提供する。

よし、掴みは完璧。

「はい？」

先程と全く同じリアクションで振り向いてくれた。

「あ、ああ、辻村君でしたか。おはようございます。」

肩に頭を埋めながら一礼する。その視線は段々俺から遠くなっている。

黒羽のつむじ部分しか見られなくなった俺は、少し見るところをずらし、他の人とは明らかに違う部分に目がいく。

別に黒羽の外見の話をしているわけではない。いや、他の人とは明らかに可愛いのは揺るぎないわけだが。

今はその話をしているのではなく、俺が話題にしているのは机だ。机の上には不自然に机を埋め尽くすほどの教科書やノートが並べられている。

…まだ授業は始まっていないんだが。

なにか違和感を感じる。だが…

…それくらい勉強熱心なのだろうと思いつき、本来の目的である挨拶はまだ終わっていないのでそちらからしようと思いを切り替える。

「俺と同じクラスだね。よろしく」

とにかく今は『黒羽』に集中することにする。

「…、はい、よろしくお願いします。」

そう言うなり、椅子が床を擦る音がしたかと思えば彼女の頭が一気に近くなる。何なのかと思ったら、ただ立ち上がっただけだった。

「す、すみません、用事があるのでこれで…」

早足で教室から出て行く。この間一切俺の顔を見ていない。やっぱり俺嫌われてんのかなあ…

これ以上ここにいる意味はないので、自分の席に帰る。

そのとき帰ってきていた達也に視線を合わせられ、腕を組みながら意外そうな声で今の俺の行動に感想を述べる。

「へえ、おまえあの子相当気に入ったようだな」

「だからちげえよ。まさか同じクラスとは思わなかったからさ」

「ニヤニヤ」

「声に出していうなよ…」

しかし、ここまで相手にされないととなると、今後俺は関わらない方が良いのかもな…

どこか釈然としない気持ちを抱えたまま、まかり先生の到着を待ったのだった。

「なん…だと？」

その言葉で、俺は四天王を倒したかと思っただらそいつは四天王の中でも最弱と言われ渡されたときと同じような絶望感を味わう。

「フツ…ついにこうして公にできるときが来たようだな…」

対する達也ははやくやりたくて仕方がないご様子。実に滑稽である。

「はあーい！それじゃ、一限目のLHLは、自己紹介してもらいまーすっ」

ロリ巨乳のまかり先生から、小学生に言い聞かせるような口調で高らかに自己紹介開催が宣言される。

しかもこれが教室に入ってきた瞬間そういうのだから、これ以外する気はないのだろう。

どうしてこうなった…

俺はあんまり自己紹介が得意ではない。というか面倒である。

で、あるのにこの自己紹介は自分の印象を4割決定づける大事な儀式であるから無下にすることができない。

そこがまた気怠さを助長してくれる。要は無駄に神経を使うのが七面倒なのだ。

ざわ…ざわ…

教室中がざわめきで支配される。

「は、はいはいっ、みんな静かにしてえー」

><な目で慌てふためきながら沈静化に勤しむ先生…あざとい、実にあざとい。

やはり可愛いはs(r)y

「んー、やだなー自己紹介」

またしても俺の背後にいる栗崎が俺の気持ちを完全に口に出してくれている。

一応前を向きながらではあるが頷いて同意しておく。

「でわでわ、出席番号1番の人からお願いします!」

ようやく静かになったところで、まかり先生は深々と頭下げ、それ平行になるように右手を差し出す。

出席番号一番の男がしぶしぶ立ち上がり、自己紹介し始める。
次号…戦慄…！

ここまでのあらずじ…恐怖の自己紹介開催…！生き残るのは誰か…？
…コロコロでありそうな煽り文はこの辺にしておいて、自己紹介と
言えば名前 前のクラス 趣味 一言がセオリーか。
そんなテンプレートに1から3番までの男達は従順にそれにしたが
った自己紹介をする。

ここまでは想定内。問題は次のこの男の自己紹介である。
どれだけクラスの連中に悪い印象（良い意味で）を与え、この先過
ごしくくなるか（良い意味で）楽しみである。

「次は、4番…お願いしますね」

「はいはい！こーんにーちはー！」

ガラツと椅子を引いてひろ みちお兄さんみたいな挨拶をしながら
立ち上がる。

この時点でかなり異質な空気をクラスに呼び込んだこいつは本当に
ある意味天才である。

手を天高く上げるその姿は完全に自己アピールする小学生と姿が重
なる。ええ、揶揄っていますよ。

ここまでで誰のことを言っているのか説明するのは、本人に失礼と
いうものだろう。

「出席番号4番、倉金達也ですっ！」

教室内在若干ざわつく。主にこいつの心配になるほどのハイテンシ
ヨンについて。

「えー、趣味は…エロゲを少々嗜んでいます」

！？

今のこいつの愚言は、口の中に飲み物を含んでいたら間違いなく吹き出してしまっくらい酷かった。

流石に自己紹介でエロゲしてるっていうやつなんていねーよ。わかる俺も俺だが。

クラスの反応はその意味がわかっていてドン引きしているやつと、わかっていなくてきよとんとしているのが半々くらいか。

「えろげ？それって一体なんですか？」

純粹無垢なまかり先生の悪意ない質問であるが、それはまかり先生こそ知って欲しくない世界だ。

世の中知らないことがあつた方が良いとはよく言ったものである。ざわ…

教室全体がまかり先生の一言により緊張に包まれる。

「E？先生エロゲ知らないんですか！？人生の4割損していますよ！？」

「ええっ、そうなんですか？ごめんなさい、先生に教えてくれない？」

自分がとんでもないことを聞いているのを自覚しているわけもなく申し訳なさそうに達也に説明を請う。

それを説明されたら今まで汚れを知らずに生きてきたであろう、心が純白なまかり先生の命が危ない。

達也…と口走りながらボディーブローで止めようとした時には、達也は解説の火蓋を切っていた。

「簡単にいうなら、先生が毎晩夜やっていることをピーーーーーで
ピーーーーーそれでピーーーーー」

達也がピー音混じりで丁寧に答える。

「えええ！？ピーーなゲームでピーーなんですか!？」

「ピーーです」

「ピーーーーー?」

「ピーーーーー」

「ピーーーーー!…わかりました、ありがとうございますっ」

お前らワザとだろ…

というか意外にもまかり先生が積極的に質問しているのはいかに。

これが結婚した女性の力かつ…!大胆…大胆すぎる…!

いや、教師として色々問題ありすぎであるし、俺から右上の女の子
なんて泣いているぞ…

「うわあ…!えろげって面白そうだねえ!」

栗崎が感心した声を上げる。栗崎がエロゲをしている構図など、神
をも冒瀆する。

「頼むから栗崎、そんなこといわないでくれ…」

「?」

そんな眩しい笑顔で小首をかしげないで欲しい。

「そう言っわけ、みんなよろしくなっ」

お得意の髪をかき分ける仕草をして達也は見るものに殺意を喚起さ

せるドヤ顔を披露して着席する。
今すぐそこをツッコもうと思ったが、とりあえずさっきのエロゲ談義について指摘する。

「頼むから人前でそんなことは言うなよ…」

「インパクトあつて良いだろ!？」

駄目だこいつ…早くなんとかしないと…

…頭が痛くなってきた。

そんな感じで再び自己紹介が勧められる

俺が自己紹介しているのは割愛するとして、だらだらと進み…

「…」

いよいよ黒羽の番になる。

ある意味俺が一番楽しみにしていた人の自己紹介だ。

人前で話すのが慣れてないであろう彼女が必死に頑張る姿をニヤニヤしながら見させてもらおうじゃないか。

だが、黒羽は凍り付いたように動かない。まるでへびにらみをされて動きたくても動けない鼠のように。

「えーっと？、出席番号26番さん？あなたの番ですよ」

まかり先生が自分が間違えているんじゃないかと、何度か手元の番号と黒羽を交互に見ながら言う。

生憎俺は黒羽の後ろ姿しか見ることができないため、彼女の今現在の表情がわからない。

「はやくしなさいよねー」

「ハリーハリー」

どこからともなくそんなヤジが飛んできた。しかしそれは達也からではなく女の声達であった。

お調子者が言うのならともかく、女の子達からそんな野次が飛び込んでくるのは意外だった。

ざわ…ざわ…

教室がにわかに騒がしくなる。

「は、はいはい！みんなしずかにしてねー！黒羽さんが発表しにくいでしょ？」

そんなまかり先生のナイスフォローがはいり、再び教室は黒羽がしゃべり出すまでスタンバイ状態に切り替わる。

「はい、それじゃ黒羽さんお願いできる？」

ようやく決心が付いたのか、黒羽は粉薬を飲み込んだときのようにコクリと首を上下させ、静かに立ち上がる。

「出席番号26番、黒羽雪見…です。」

「…」

「…」

この緊張の静けさをスポーツで例えるなら、記録を更新している走り高跳び選手がスタート地点でタイミングを整えている場面と同じである。

「k……」

クラスが水を打ったように静かになる。

そして次の言葉は名前を言ったときよりさらに小さな声であったが、破壊力はこの教室を驚愕させるには十分すぎた。

「か、か、か……れ……し……ぼ……しゅ……う……ちゅ……う……です……！」

な！？

途切れ途切れではあったが、確実にこういった。『彼氏募集中』……と。

黒羽の性格とは全く真逆なこの発言により、クラス全体が爆発したかのような急速さで各々の思いが交錯する。

総理大臣が国会で失言したときに陥るようなこの状況の中、総理は穴に落ちたかのように、どさつと席についた。教室がここ一番の盛り上がりを見せる。

「わ、わーっ！みなさんおしずかに……」

先生の必死の注意に耳を傾ける奴などおらず……いや、聞こえていないというのが正解か。

そんななかで、ひと際大きい声でしゃべる女生徒たちがいた。

「ちよつとー！自己紹介から大胆ねー！」

「そんなにあせることないんじゃないのー？キャハハw」

「新学期ははじまったばかりよー、そんなに男に飢えてるのー？」

キャハハと、女生徒達が笑い合っている。

大胆だなあ……

誰もが思うであろう事を思ってしまう。

「おいおい、辻村が狙ってる女の子、大胆だねー」

ヒューツと言いかねない男が、率直な感想を述べてくる。

「狙ってねえよ…」

言わずもがなではあるが、あれは明らかに誰かに言われるよう指示されている。

わざわざ恥ずかしがってまであんなことを言う理由が何処にあるというのだろうか。

もしさっきの女の子達の言う通り男に飢えているというのなら、もっと俺とかに話しかけてきてくれてもおかしくない。…それは自惚れすぎか。

結論を言わして貰えば、罰ゲームかなにかだろう。そう思うほか無かった。

教室中は、しばらく黒羽の発言で盛り上がっていた

4月4日/火曜日(前) (後書き)

という訳で前半終了です。

父親との関係が、今後のストーリーにどう絡んでくるのか…？
楽しんで頂けたら幸いです。

次回は個人的に好きなキャラが登場しますよ！

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月4日／火曜日（中）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで中編です。少しづつ物語は動かしている…つもりです。とはいえまだまだ日常パートですので、適当に読んで頂ければ幸いです。

それでは、どつぞー！

4月4日／火曜日（中）

黒羽の壮絶なカミングアウトにより予想外に盛り上がった一限が終了し、生徒達の待ちに待った休み時間が到来する。

思わぬ伏兵がいたもので、休憩にはいつてもチラホラとダークホースな彼女の名前が口に出されていた。

そんな雰囲気腰を据える事ができないのも無理もない。噂の張本人は顔から火が出て速攻でここからログアウトした。

確かに可哀想ではあるが、こうして話題に出されるほうが達也みたいに誰にも相手にされないよりましな気がする。

怪我の功名…というやつなのかもしれない。

一方達也はあんなインパクト（笑）の発言をしたのに怪我しかしていないわけだが。

「ふふ、みんな俺の話題で持ちきりなう」

どこまでも都合の良い耳をお持ちな達也は、近いうちに見られているという感覚すら錯覚してしまうかもしれない。

俺も近いうちにこいつに行きつけさせる精神病院をググってやったほうがいいかもしれない。

そんな事を思いながら達也の恍惚にとらわれている間抜け顔を最大限見下した目で見てみると突然その顔が顰めっ面に変化する。

「んん…あいつの声が聞こえたなう」

…あいつ？

「幻聴にあいつもこいつもないだろう」

地の文にするのが面倒なので直々に達也に聞いてみる。

「さっきまでは幻聴だったが、今は違う…」

ニュータイプ

NTさながらなものを感じたらしい達也は、自分が幻聴していたと認めてでもあいつの声は否定するつもりらしい。

こいつにしては潔よかったので、「冗談ではないと悟った俺は耳に神経を研ぎ澄ませあいつの声を追いかけてみる。

……

…確かに、あいつの声が聞こえる…というのは語弊がある。あいつの声色は一般的なj・p・o・p・pでどんなに伴奏が五月蠅くても主旋律が聞こえるという感覚に非常に似ている。
要はすつごく特徴的ってことである

「ありがたく頂戴させてもらいますわ。それでは」

そして俺達は喉を震わせているものを認識するだけでなく、震わせてる本体もキヤッチすることに成功する。

どうやらうちの女子生徒になにかをもらったらしく、上機嫌さが見て取れる。

「か、かかか、つか、か神納寺！」

達也が死体を見て叫ぶように、顔を歪ませながら大声で彼女の名前を叫ぶ。

その顔と台詞をもしも演技でやったというのなら、こいつは俳優として食っていけるだろう。

…いや、こいつ割と本気マクで演技をかましている。こんな所に無駄な才能が…

「？」

そんな声に反応した女子生徒は、後ろを振り返る。

その振り返る様は、キラキラ光るエフェクトが掛かっても何も違和感を感じないそれだった。

彼女の洗練された『心の臓を喰らうもの』^{ゲイ・ホルゲ}のような視線が瞬く間に俺達の心臓を貫く。

俺達と確定したらしい彼女は不敵に笑みをこぼして第一声はその艶美な唇から出て行く。

「あーら、生き方、性格、顔、人生が全て歪んでいる倉金ではないのです」

綺麗な花には棘があると言われるくらいだが、言葉通りの彼女は周囲の人間をあつという間に毒状態にしてしまうほどの猛毒を吐き散らす。

その臭いすぎるほどの貴族を臭わせる話し方は、昔からいっぺんたりとも変わっていない。

ゆっくりと、何度も何度も刺突しながら俺たちの方に歩み寄ってくる。

やられっぱなしは嫌なのか、達也が反撃を試みる。

「それが元クラスメイトに対する言葉ですかねえ。相変わらずだな、かかつかか神納寺」

「さつきから嘔みすぎですわよ。なんですか？かかつか…かか神納寺って」

…今「自分でも嘔んだよな。おい」

と言うのは頭で変換するよりも先に言葉がでた俺の発言である。

「く…倉金の戯れ言につきあつたままですわっ」

ぷいっとわかりやすすぎて寧ろツツコンで欲しいのかと思いたくなる反応をする。

おう、そうやって取り繕うところがまた可愛いのう。

「そ、そちらも相変わらず阿呆みたいに元気そうでなによりですわ

まるで立ち絵のように腕を組んでいる姿勢を崩さない神納寺。

…神納寺夏帆かんのつしなほそれが彼女の名前だ。

立ち位置的には攻略対象外k…二年生のときのクラスメイトだ。

金髪貧乳微ツンデレという、エロゲコーナーに入って30秒もしないうちにパッケージで見かけそうな特徴である。

そこにツインテールが追加されれば紛う方ないテンプレ鉄板美少女のできあがりだが、生憎彼女はかなり長めのウェーブヘアだ。

二次元の女の子で例えるなら貧乳ツンデレで髪のリュームが若干落ちたシェリルといえばわかってもらえるだろうか。…いくら現実じゃなかないからって『芸能人』で例えるんじゃない。二次元の女の子』で例える辺り、俺は相当末期なましくみのかもしれない。

これも達也の洗脳に近い教育のおかげである。…はあ…

あとここまでの会話でわかる通り、つくっているのかどうかかわからないがステレオタイプな『お嬢様』口調である。

…元々彼女は存在しなかったのだが、この日常パートが『俺達也栗崎』の会話で埋め尽くされるのを忌避するために誕生したというどうでもいい裏話がある。

逆に言えば個別ルートでは差し支えない程度しか登場しかない

のが哀しいところである。
そんな不遇なキャラではあるが、個人的には気に入っている。

「つ、辻村殿…そんなわたくしを舐め回すように見ては… / / /」
普通の人間ならそう思うのが自然であり、神納寺は模範的な解答を示してくれる。

…元々存在しなかった〜とか思っていて、ただブーツと見ていただけだなんて口が裂けても言えない。

「まあ…こんなキャラは必要だよな」

達也が突然脈絡もないことを呟く。…俺の地の文を汲み取ってそう言っているのなら話は別であるが。

どうやら『地の文を読み取る程度の能力』を持つ達也にはばっちり観測されていたようだ。

もしかしたらこいつと離れているときでも読まれているんじゃないかという強迫観念に駆られてしまう。

「まあ倉金の意味不明な発言は無視するとしまして…、本当、お久しぶりですわ…辻村殿」

もの凄く感慨深くそう言ってくれるのは非常にありがたいが、別に10年ぶりの再開というわけでもないのに、大袈裟な奴だな。

彼女の気品から手にセンスがあればどれだけ似合っているだろうかと思うが、彼女の右手に握られているのは…

!?

…Gペン?

ないセンスを思い浮かべようと思ったたら先客がいて、しかもそれがBARにジャージ姿でくるような場違いなものが確かに存在している。

Gペンと言えば、アナログで漫画を書くときに一般的に使われている奴ではあるが…なんで彼女がそれを持っているんだ？

「…おう、久しいな」

最もらしい相槌を打つが、心は完全に彼女とは無縁としか思えない異物に奪われている。

なんだ！？彼女は漫画でも描いているのか！？ジャンルは！？二次創作なの！？オリジナルなのかつ！？

Gペン一本ではち切れんばかりに出てくる妄想が止まらない。

「…辻村殿？」

「…ハッ、いやなんでもない」

神納寺が怪訝な顔でこちらをのぞき込んできたので、体裁を立て直すことに集中しすぎてペそんな事を言ってしまい、ペンについて聞きそびれてしまった。

大変興味があるが休み時間ももう終了間近であるし、まあ今度あったときに聞けばいいかと思いつく。

「これからk…おっと」

「どうした？俺に告白することを忘れていたのか？」

神納寺がいつも俺が達也にするような尻目に懸けた目で達也を見る。しかしお嬢様オーラ全開の彼女がそれをすればまたひと味違う。これが本物の見下しなのかと敬服すら覚える。

「…倉金に告白する時間がありましたら気泡緩衝シート（かほうじんじょうしーと）を潰して
いる方がよっぽど有意義ですわ」

「ズキユウウン…！…あぁ…もう我慢できない…踏んで下さい」

サウンドエフェクト
セルフSEを入れながら簡単にドM心を擦られた達也は人としてど
うかと思つ発言を当然のよつに言う。

「なら跪きなさい」

「ワンツツ踏んでワンツツ」

「ノリノリだなおい！」

俺が神納寺にツッコむと、とつてもドSっぽい、婉艶の中に攻めが
入っている表情を残しながらこつちを振り返り、口元を僅かに上げ
てこつ言った。

「ホホホ、こんな下僕がいれば乗り気にもなりますわ」

oh…冗談で言っている気がしない。

「もう次の授業が始まってしまいますわ。名残惜しいですが、わた
くしはクラスが違います故、これにて失礼させて頂きますわ」

跪きっぱなしの達也を放置してそんなことを言う。これが噂の放置
プレイかつ。

「お、おう、またな」

「ごきげんよう」

その綺麗な顔に見合った笑顔を見せて教室から出て行く。

神納寺夏帆…謎が多すぎる子だ…

「ハツハツハツハツ」

踏まれ待機しているこいつの尻を思いつきり蹴るか迷ったが、ここは神納寺に習って放置することにした。

「ハツハツハツハツ」

∴

「ハツハツハツハツ」

∴

「ハツハツハツハッあギャウンっっ！？なんでお前が蹴るワッ！謝れ！謝れワッ！！」

「うるせえお前のせいでいつまで経ってもフェードアウトできねーんだよ！」

この後も適当に時間が流れ、授業が終わってようやく昼休みになる。当たり前ではあるがこの学校に給食という制度は存在しない。

その代わり所謂学食が別館にそびえ立っており、暖かい飯を求める者は食券を握りしめて昼休みを告げるチャイムを合図に一斉に走り出す。

弁当、パンを持ってきているものはゆったり教室で仲の良い友達と食っている。

それらの中間に位置する（？）のが購買部であり、弁当やパン、飲み物が心せましと並べられている。

そこも休憩の10分くらいは戦争状態であり、ちょっとした満員電

車を味わうことができる。

この三つの選択肢の内どれを選ぶかは生徒次第というわけだ。さて…学食までは行くのは億劫だし、一人暮らし同然なので弁当もないし作る気もない。

そうなるに残るのは購買に行くという選択肢だけだ。さて、達也でも誘って…

「はははっ、あはははは！いやいや、そこまで見透かされているとはね。これでは私だけが愉快な道化^{ビエロ}ではないかっ」

某中2病キャラであるヒノエさんの名言を声優ぶって音読するが棒読みなので折角のセリフが陳腐なものにしている輩がいる。誰がだなんてもはや愚問である。

「おら、小説読んでないでさっさと昼飯を買いに行くぞ」

「なぜなら私は世界を滅ぼす絶対悪なんだ」

「うっせえいつまでやってんだよ」

「なぜなら私は世界を滅ぼす絶対悪なんだ」

腕をピンと伸ばして本を読んでいる小学生に軽い手刀をいい音が鳴りそうな頭に食らわす。

「ウツ…、ふう…」

その一撃でぱたんと小説を閉じた達也は何故か賢者モードに突入していた。

「…さ、昼食を買いに…なぜなら私は世界を滅ぼす絶対悪なんだ」

ルビがずれてでもそう言いきった達也は立ち上がり、すまし顔で出て行く達也の後を追って購買に向かうのであった。
いっておくがツッコむ気は毛頭ない。

1階にある購買部に到着する。

俺達三年生は4階にあるため、2階や3階にいる一二年生に必然的に距離のハンデを与えることになり、更に先程の会話によるロスタイムで俺達が到着する頃には人が溢れかえっていた。

相変わらずの盛況ぶりで、このゴミゴミとした風景は始業式の帰りを彷彿させる。

欲しいパンや弁当を我先と購買のおばちゃんに差し向け代金を払おうとしており、おばちゃんたちは目を回しながら怒涛の有限の多連^{タック}星に対応している。

こんなに人がいたら、捌けた頃には弁当は完売し不人気パンの残骸が戦場後に転がる末路だ。

俺も1年の頃はこの戦争に積極的に参加して欲しいものを強奪していたものだが、全て食い尽くした今、体力を削ってまで参加するほど欲はない。

大人しく余らない日がない『今最高に売れています!』という煽り文句が値札の上に書かれた『生トマトパン』とコッペパンをほぼ全部くりぬいて粉砂糖をただ詰め込んだピザ^{デラ}ご用達の『ピザパン』という、パンの名前が煽りという斬新なパンを買つとしよう。
もう少し引いてきたら買いに行こうかな。

「人混みがうっとおしいからここで少し待とうぜ」

購買部から少し離れた場所で事の成り行きを見ていた俺と達也。右肩隣にいる達也にそう通告する。

「よかるう」

片目を閉じてゆったりと頷く。

あー…いるよな、特定のキャラが好きすぎてその口癖とか決め台詞を連呼する奴。 ……なんだこのもやもやとした気持ちは…

「同族嫌悪 ってやつだよ」

「うるせえその通りだよ、いわせんな恥ずかしい」

「はっはっは」

扱いづらい達也を横目に、バーゲンコーナーに群がるおばちゃんのような学生が三々五々していくのを待った。

それから五分後、人の出入りが良い塩梅になってきたので、さっと買い物を済ませる。

「さ、どこで食おうか」

！？

至極普通に聞いてきやがった。

さっきの設定は最初から無かったかのような態度の達也に少々面食らう。

初めからロクな答えなど期待していない、いわば徒労とわかっているが、達也に申し出してみる。

「お前さっきのキャラはどうした」

「は？キャラア ? 気持ち悪いこと言わないでくれない!?! 全く、

これだからキモオタは…」

腕を組んでそっぽを向きながらという伝説のポーズをやりながらその答えやがった。
こいつ殴りたい…

「そ、その言葉をそっくりそのままお前に返すことにして、じゃあ…」

1 屋上

2 教室

3 職員室

…と本来ならここで選択肢が3つ出てくるわけだが、俺はこれを選ぶことしかできない。

「屋上で食うか？」

こんな天気の良い日は外に出て食うのが一番だろう。

「屋上へ行くこうぜ…久しぶりに…キレイだったよ…」

…という訳で屋上に到着する。
勿論屋上という位なのだから、学校の一番上…つまり5階に位置する。

俺と達也は1階の購買部からここまで来たわけだから、一気にのぼってきたということになり、額に少々汗が滲むほどの疲労を強いられる。

そんな学校の屋上は生徒達も自由に出入りができ、昼休みの憩いの場となっている

というかあんまりギャルゲーで屋上が解放されていなかったり、舞台にならないって事はないような気がする。

それにこの作品もすっかり踏襲しているわけだ。

憩いの場と今謳ったばかりだが、夏は熱すぎて冬は寒すぎて利用者は激減する。

が、今のように非常に過ごしやすい暖かさな春なので、爆発的に利用者は増幅する。

今日も屋上はちょっとした祭りでもやっているのかと錯覚するほどの人ばかりだ。

「今日も賑やかだな」

各人が思い思いの昼休みを過ごしている風景を眺めながら率直な感想を述べてみる。

一方達也は目を細めて顎に手を当ててなにやら呟いている。

今朝黒羽にそうやったように聞き耳を立てる。

「この状態でもしテロリストが来たら俺はこうしてああやってこうなって…ブツブツ」

…ラリアットを食らわせたい気持ちをグツところえながら中2病バリバリな達也を生暖かい目で見える。

「…あそこで食おうか」

俺が指さす先には丁度カップルがベンチから腰を上げているところだ。

そんな彼等を見た達也は片目を半目にしてゆるい笑みでこう言った。

「ん、なんだリア充か。でもあの男はせいぜい2、3人としか付き合ったこと無いんだろうなあ。フツ、俺なんてもう300人は超えたぞ？ん？」

これが現実と空想の区別つかなかった末期患者の典型的な症状か…非常に良いサンプルになりそうだ。

そんな末期患者^{たっや}は、彼に負けているのに誇らしげにそんな妄言を言うのだからもうどうしようもない。

「俺にドヤ顔されても困るんだが…。それにお前は2Dとしか付き合っていないわけで、あの人とは付き合っている人の次元が違う。」

正論を言ったつもりだったのだが何一つ顔色変えずに達也は反論してきた。

「はあ！？俺ちゃんと『3Dカスタム小学生』で3Dの彼女と付き合ったし！はい完全論破！！」

oh…

「も、盲点だったわ（棒）。すまない…」

「ふっ、若さ故の過ちって奴だな。気にするな」

oh…

「まあどうでもいいや、座るか」

達也の返事を待たずに歩き出す。春の陽気が俺を誘ってきて仕方がないのだ。

「ま…待ちなさいよっ」

『お嬢様系ヒロインが言いそうな言葉ランキング』第6位にはランクインしてもおかしくないセリフを言いながらしっかり付いてくる。

「よいしょっど…」

達也と馬鹿な会話をしていたせいで他の誰かが先に座ってきてもおかしくない状況だったが、幸運にも座ることができた。

このベンチの2メートル前後の正面には柵があり、その網の向こう側は所謂空中なわけだが、更に視線を奥へ向けるとこの町をうまい具合に見渡せるかなりおいしいポジションだ。

あれがデネブ アルタイル ベガ…と夏になれば夏の大三角を指さし覚えて空を見るリア充カップルが増える場所でも有名である。

そんな非リア充お断りなベンチに両方非リア充な男二人が堂々と座るのはいかなものか。

本気^{マジ}もんのカップルからひややかな視線が送られているのか、爽やかなはずの風が妙にしめっぽい気がする。

「ハムツ ハフハフ、ハフツー！」

鋼の心を持つ達也は全く気にした様子もなく購買で買ってきたのり弁をカツ食らっている。…その弁当冷たいはずなんだがな。

実際の所あまり俺も気にしているわけでもないので、遠慮無くトマトパンの包装を破り、かじりつく。

…

味は悪くないのだが如何せん生トマトなため好みが分かれるのも当然だというのに、嘘についてまで売ろうとするのなら販売中止にすればいいのに。

あれか、売れないはずなのに残っているとえば某ファミリーストランの『梅昆布茶』と同じか。…好きな人がいたら謝る。

そんなどうでも良いことを黙考しつつ、パンを咀嚼する。

ゴクリと一口目かじったパンを完全に飲み込んだ時のタイミングだった。

「…なんか視線を感じるわ」

唐突に女口調な男の声が耳に入る。

その気の間人が近くに居るのかと疑ったが、その行為がどれだけ無駄なことかと思ひ直す。

隣の奴以外誰がそんなことをするだろうか、いやしない。

しかしながら^{ムードクラッシュヤー}秀困気殺しな達也がこの視線に気づけるとは意外だ。

「意外だな、この視線がわかるのか」

と、ついつい感心した調子で言ってしまうほどだ。

その言葉に達也はなんの違和感も感じず、気障に笑ってまるで真犯人を指摘して勝ち誇ったような顔をするのだから笑ってしまう。

「フ…、なんせ、この視線は『女の子』のものだからな。我の鉄の^{アイアン}処女の範疇にあるものを察知するなど、造作もない」

「そんな所だけめざとい達也はあながちオンナノコマスターの称号は伊達ではないのかもしれない。自称だが」

「なんだよその地の文は。それよりこの視線はマジだぞ、マジ」

のり弁を手元に置いてまで熱弁する辺り、マジらしい。

だからってキヨロキヨロして探そうとするのはなんか達也に負けた気がするので、俺はあくまで気にしない体で貫く事にする。

「ままmままmままm全くう！だだだっだ誰だよおお。俺をみみ見つめる奴はああ。まま、まあ、おお俺は全然つつ、きに、き、気にならないけどな？」

そう言いながらレーダーのようにグルグル首を回転させており、さつき自分が思ったことをぶち殺したい。

相手をしてられないのでコーヒー牛乳と言う名のコーヒー風味の砂糖水を一口啜り、甘い感覚を舌で満たしている

「す…m…ん」

唐突に女口調な女の声が carousel して耳に入る。いやそれ女だよ。

そしてこの声の主は俺の予想の範疇を超えていた。振り返り、その主に驚愕する。

「黒羽…？」

俺達の真後ろに立つ、黒髪を軽くなびかせる少女は、逆光のおかげもあるのか全身がやや黒く見えるその姿は天国へ迎えに来た天使のよう^にに思えた。

だがその正体はクラスメイトであり、自己紹介で爆弾発言をした美少女…黒羽雪見である。

つていうか達也はこんなに近くにいたのにどうして気が付かんのだ。視線は気づけても姿は気づけない、何とも役に立たない鉄の処女の^{アイアンメイデン}よう^にだ。

達也が気づけなかった黒羽は若干息を切らせながら立っており、一番最初に合ったときと姿が重なる。

俺から無意識にはずれてしまつ視線を無理矢理合わせようとする黒羽の必死さがひしひしと伝わる。

やはり黒羽は人と話すのが苦手なみたいだ。

だがそんな彼女がこうして俺を探して、勇気を振り絞って来てくれたのは大変光栄なことであるし、なんて律儀なんだ。

「いや、俺のほうこそゴメン。なんか不良NOODみたいな振る舞い方をして怖がらせてしまつて」

自嘲気味にそう返事をする。彼女は困つた表情になつてこう言った。

「い、いえ…そんなことないです。私が悪いんです。本当にごめんなさい」

途端に彼女のつむじが露わになる。勿論黒羽が深々と頭を下げたから。

「そ…そんな頭を下げなくても…。ほら、頭を上げて」

思わず立ち上がり彼女の元に寄る。周りからしてみればかなり異様な光景である。

ゆっくりと俺の足元からだんだん顔を見上げる形で上目遣いをしながら顔を上げる彼女にドキリとしてしまい、顔に出ていないか心配だ。

こんなCG一枚絵があつたら達也は有無を言わず即保存してしまつだろう。

「…ゆるしてくれますか？」

それこそ神に懺悔し許しを請う修道女な彼女を許さない理由などの世にあるわけがない。

それ以前に許す許さないの話ではない。

「許すも何も、俺はそう言われる筋合いも理由もないよ」

そう黒羽に伝えるとほんのり笑顔を垣間見せてくれた。

こんな場面で彼女の初笑顔を拝めるとは思ってもみなかったわけで。あえて言おう、可愛いと。

「でもでもさ黒羽ちゃん、人と話すのは苦手なのにさっきの自己紹介ではもつとチャンスを欲しがってたみたいけど？」

この良いムードの中、なんとも達也が無神経グッジョブな質問をしてきやがった。おう、俺もそれ気になってたよ、実際。

「~~~~~!」

そんな疑問を投げかけると黒羽は忽ち完熟トマトでもこんなに赤くならないぐらい真っ赤になる。

それが意味するのはたしてどちらなのか。

「い…いえ…あれは…その…罰…罰ゲームです…よ」

胸前に軽く握った拳を押しつけ、前屈みで小首をフルフルと振りながら声を絞り出してそう言う。

それを唇を歪ませ何かを期待して聞いていた達也はあからさまに残念そうな溜息をついてこう言った。

「なんだ罰ゲームだったのか…羞恥プレイが好きなヤンデレ女の子っていうかなりレアなキャラかと思ったのにさ」

もはやこいつと同じ生物でいるのが恥ずかしくなってくるような事をかろつじて黒羽には聞こえていないみたいだが平然と言つてのける達也に痺れる憧れるう！…なわけねーだろ。

「く、黒羽、変なことを思い出させてしまつてすまない。ま、まだ昼飯も食べていないだろ？早めに教室に戻らないと昼食が終わつてしまつんじゃないか？」

とりあえずこれ以上達也が余計な事を言つてまた変な誤解を作るのはゴメンだ。

一刻も早く黒羽にはこいつから離れて欲しい一心でそう聞いてみる。

「そ…そうですね…。謝ることはできましたし…」

涙目になりかねない瞳を向けてそう言う。随分前向きに捉えてくれたよつで嬉しい。

「そ、それじゃあわたしはこれで…。本当にすみませんでした」

「ああ、本当に気にしなくて良いから。わざわざありがとう」

まだ赤みが抜けきつていない小顔を縦に深々と振り、彼女は屋上の出入り口のほうに足を運んでいった。

二人でしばらくその姿を呆然と見つめる。

あんなに綺麗な髪だったら画家は色塗りがさぞ楽なことだろうと、改めてそう思った。

「…達也」

彼女の後ろ姿が完全に階段のほうへ吸い込まれた後、俺は言いたいことを言わせてもらった。

「ん、どうした？」

「どうした？じゃねえよ。三次元の女の子は『耳』ってもんを持っているんだ、お前のさっきの言葉が聞こえていたらドン引きじゃすまないんだぞ？そりゃ二次元の女の子は画面の向こう側にいるわけで、お前がいくらブヒブヒ言ってもシナリオ通りにしか喋らないけどよ」

このエロゲ脳に現実の女の子しかもっていないものを教えてやると、一拍置いた後、なぜか殊勝顔になりこっぴど返事をした。

「そ…それは…。……。紅…お前は気付いて…いないのか？この…『試練』に…、だ」

「なに？」

「俺は初めから自分の株なんてきにしちゃあいない。問題はお前の評価をいかに下落させるか…」

達也は空になったコーラのペットボトルを左手に打ち付けながら語るような口調でそう。

パツと聞けばそれはそれは酷いことだが、達也の話し方を憶測するに、ただ『遊んでいる』だけだ。

「俺は道化を演じる（ロヒ）ことによつて君たちを試していたんだ。…そう、初めからいつているだろう？」

酒が無くても自分の世界に泥酔できるこの男は、とびっきりのドヤ顔でこっぴど続けた。

「私は世界を滅ぼす絶対悪なんだ（ドヤア）」

「嘘こけ！！後付の言い訳じゃねえか！！」

「あへえ！？」

達也のペットボトルを奪い、全力で頭に叩きつけたのだった。

面倒な掃除が終わり、午後の授業が始まる。

俺の掃除場所は4階男子トイレというサボるには絶好のエリアなのだが、問題はメンバーであり、省略したい気持ちを堪えて言わせてもらえば、達也である。

こいつと一緒に掃除などそれは掃除紛いなことしかできず、俺は終始ツッコみっぱなしだった。

おかげでかなり疲労をため込む結果となり、この5限は睡魔との死闘で終わりそうになる…。

…かと思えば、時間割を見ればその瞬間、睡魔の圧勝で終わることが決定した。

なぜなら5限はあのEr…ロリ巨乳のまかり先生プレゼンツの現国だったのだ。

以前記したように彼女の授業は練乳も凌駕する程の激甘な先生であり、俺が居眠りしたところで先生にとってそれはただの生徒に過ぎず、叱りつける対象などではない。

という訳で俺は安心して安眠できる。…なんか頭痛が痛いみたいになっっているな。

「は、はあーい！皆さん授業をはじめちゃいますよー！」

身長の低さが本人が狙わないあざとさと呼ぶ。というのも教卓がまかり先生の大半を隠し、残るのは胸から上だけだから。

嫌でも見ざるを得ないその格好に、あざといと呼ばずなんと呼ぶ。

こうして子どもっばいあざとい挨拶でまかり先生が授業の開始を宣告する。

ロリコンの目を殲滅させる姿に達也はとつくに天に召されていたが、幸い俺はそんな性癖を持っていないので依然として眠気が襲撃し続ける。

「ふぁ…眠い…」

こんな気持ちいいポカポカ陽気を前にして昼寝をしないなど、ハンターがマタタビを持っていてもそれを盗まない　アイルーみたいなものだ。

ここは生理的欲求に従ってしばらくの休息をいただくことにしよう。

「あふ…」

一眠りしようとして、体を傾ける。この調子なら数刻程眠ってしまうことが出来る自信がある。

…
…
…グサッ

「…」

何かが刺さる。

だが意識が朦朧としている俺にとってそんな事は実に些細なことだ。しかし…

メメタア！

「いつてっ！？」

眠っているとき突然体がビクつくあの現象が何者かの手によって意

図的に誘発される。

無理もないよな、メメタアとシャーペンらしきもので背中を刺されたのだから。

「くつくつくつ…」

後ろから笑をこらえた声がある。俺が知らない間に席替えがあった以外なら、誰がやったのかは明白だ。

「なんじゃい栗崎」

普通に後ろを向く。

「あはっ」

肩くらいまでのびている栗色のストレートの髪で、大きい三角のピンで髪を分けている少女がケタケタと肩を揺らしながら笑っている。陸上部主将、栗崎あずきが俺の眼前にいる。

「授業中にメメタアは卑怯だろ」

「アハハッ ごめんねっ。でも授業中寝ようとする辻村君もわるいよお」

これ以上ない正論を言われて完全に反論の活路をふさがれてしまう。
…くそっ。

「うつ… まあ それを言われたら何も言い返せないな」

両手をあげて参ったポーズをすると栗崎はシャーペンをまわしながら

「うんうん、授業は真面目に受けないといけないよ。定期考査赤点とっちゃうぞっ?」

「わかったよ、受ければいいんだろ? 受ければ。でもその前に」「んー?」

俺は栗崎の視線を誘導するようにゆっくり達也のほうにシャーペンで軌跡を描く。

「こいつをおこしてくれよ。俺だけじゃ不公平だ」

厳密に言えばこいつは寝てなんかいないし、現にこいつは目を開いて起きている。

だが精神は完全に飛ばしているのだ。いつてしまえば植物人間状態。そのことを主張すると栗崎はもの凄い不思議なことを言われたときのような顔をする。

「何であたしがそんなことしないといけないの?」

!?

「え? おまえ、授業はちゃんと受けないとだめだって今言ったじゃないか。なら、授業をちゃんと受けていないこいつも起こすべきだろ」

「あたしそんなこといったっけ?」

!?

10秒前に自分がいったことを証明する爆弾発言。え?! 言ってることがちぐはぐすぎてすっげえ戸惑うんですけど!?

「それにしても今日は暖かいね。あたし何だか眠くなってきたっ

た

え？

「お、おい！ちょっと待てよ！？おまえさっき言ったことと180度回転しているぞ？」

「ふえ…？今日ほど寝るのに適した日はないですよ。それじゃあ、お休み〜」

「矛盾だ！矛盾だっ！！！」

つい声をあげてしまった あ…

「辻村君ー？今は漢文の時間じゃないですよ？今は現代小説（笑）『はなだね』の5ページの23行目をよんでいるところですよー？」

まかり先生が小説ですらないものを読んでいるのでそこを突っ込もうと思ったが、今はやめておく。

「す、すみません…！」

適当に謝ってこの場をやり過ぐす。

「りょうかいですー。では続きを綾村さんおねがいしますね〜」

授業を通常状態へとシフトさせることに成功させて微弱に安堵をした俺は、改めて栗崎に顔を向ける。

「栗崎っっ」

「くくくくく…」

栗崎がまた、笑いをこらえていた。

その姿を見た俺に一筋の閃光が脳内を駆け抜ける。

畏だったのだ。俺を陥れるための…！

これは全て孔明の罠だったのだ…！

……なんだよこの×は……

4月4日/火曜日(中) (後書き)

という訳で中編終了です。

本文のなかにも書いてある通り、神納寺は元々存在しなかったキャラです。

彼女が行う行為に物語を動かす力はありません。

つまり神納寺との関わりの部分が無くても物語は正常に進むという事です。

なにこの言い訳って思う方は、是非次回もご覧下されば幸いです。

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月4日/火曜日(後) (前書き)

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで後編です。

すみません今回作中でも突っ込んでいますが400行を超えています。それどころか500行も超えています。

グダグダな文章ですが、本当に暇があるときに読んで頂ければと思います。

それでは、どうぞー！

4月4日／火曜日（後）

「…という訳で、これで授業をおわりますねー」

日記を書くときは最初会話文から入れるといいねと小学生の先生に言われた記憶が何故か蘇った。

そんなどうでもいい事を考えてしまうほど、俺は悔しさで錯乱しているというのか…？

俺は深呼吸と勘違いされるレベルの息を吐き出しながら、国語の教科書を机に突っ込む。

栗崎氏による孔明の畏に嵌められてすっかり眠気が雲散霧消してしまった俺は、結局普通に授業を受けきってしまった。

なのに栗崎はあの後本当に寝てしまったのだから俺はまめ鉄砲を食らったハトのような顔にならざるを得なかった。

この栗崎にしてやられたことによる敗北感が非常に歯がゆい。

しかしこの『はなだね』にでてくる友人が達也にそっくりとか酷似とか、気持ちが悪いくらい似ているので授業中ずっと嫌悪感しか頭を支配しなかった。

…まあなにがともあれ休み時間に突入したんだ。これで先生に邪魔されることなく栗崎と決着をつけるときが来たようだ。

おっと、好敵手ライバルにこれ以上背中を向けるのは失礼というものだ。

俺はトラップを仕掛けた本人に話す体勢を整える。

「栗崎てめえ…。俺をはめやがってっ…！」

栗崎孔明は丁度教科書類をしまい込み、小さな伸びびをして授業に耐えた己の体をを労っていた。

そんな時に俺が悔しさを露わにしながら問いかけると、栗崎は格闘家ミルコ・クロコツプの『お前は何を言っているんだ』みたいな

顔になる。

そして彼女はそんな顔通りの台詞を言ってくれた。

「え？あたしなにか辻村君にいったっけ？」

「な…？」

ひよっとしてそれはギャグでいつているのか？

ひよっとしてそれは俺を試していつているのか？
挑戦されたからにはそれに応じなければ。

「寝るなっていつておいて自分は寝てたじゃねえか」

「う、ううん？ごめん、あたしなんにも覚えてないっ」

露骨にキスしたいような唇を作り、首を斜め45度に傾け、困ったような表情で左手の人差し指を頭に当てるといつ達也がやればガンジーすらも殺意の波動に目覚めて瞬獄殺するレベルのポーズを取る。これは栗崎だからこそ可愛い。たとえどの角度で見ても…だ。

…と、そんな事を考えている場合ではない。

今は冗談なのか素なのか判別付かない彼女のその言葉がそのどちら側に属しているのかを頭の中で談義する方が優先事項である。そう思うほど本気ではないが。

「やれやれだぜ…」

「あはっ、もしかして怒らせちゃったかな？」

至って普通の言葉なのに俺ぐらい教祖タシヤに汚染されているとどっちの意味で言っているのかわからなくなる。

『テメーは俺を、怒らせた』と言つべきか思い惑ったが、やめた。

「いや、もういい啦」

二年生の頃から彼女はこの性格は少しも歪まず、たびたび俺達を混乱させてきたが、何故か憎めない。

人はそんな俺を甘い男だと思つかもしれない。だけど

「ごめんねえ、あたし午後の授業になるとなにいいだすかわからないからっ」

これだよ。

二カつとつい花丸をあげてしまいたくなりそうな100点満点の笑顔をされたら、変なことを考えるのも馬鹿馬鹿しくなるといっただ。

この笑顔こそが、彼女を恨めない最大の理由なのかもしれない。

そんな彼女は天然キアラっぱいが、実は成績上位者の常連であり、一部では成績四天王の一人とまで噂されている。

『ククク…奴は成績四天王の中でも最弱…。だから成績最上位者な我が力を貸しているのだ…！』

…ああ、これは成績最底辺者が勝手に噂にしたんだった。

「それじゃあたし、チヨイと購買部に行ってプリン買ってくるねっ」

そんな事を考えているうちに栗崎はいつの間にか可愛らしいがま口財布を手に持ち、そんな宣言をしていた。

はにかんだ笑顔を浮かべ、子どもっぽく立ち上がるその姿に俺は少しだけ元気をもらったような気がした。

「ああ、いつてらっしやい」

別に断る理由もないので、快諾する。

栗崎はそれに頷き、軽やかなステップで踵を返し、なにをそんなに

急いでいるのかわからないが猛ダッシュで教室から脱走していく。

「いってきまーすっ」

挨拶に遠近感が出てしまっくらのスピードに思わず苦笑いしてしまっ。
流石100M短距離走者。スプリンター

さて、栗崎が疾風の如く教室から出て行ってしまったのでやること
が無くなってしまった。

「…」

隣を見ればまだ放心している達也は比喻でもない『心ここにあらず』
ってやつだ。なにこいつ幽体離脱でもしたのか？

はやく三途の川に流されなかなと思いつつ、肘をつきながら各々
がそれぞれの休み時間を過ごしている教室を適当に眺めていると

「あ、神納寺さん、仲吉君の居場所わかる？」

俺はこの後、適当に眺められはしない事態を目の当たりにすること
になる。

きっかけはうちのクラスメイト…俺の目の前の席にいる子が神納寺
にそんな珍紛漢紛な申し出をしたときからだっ。

お前は何を言っているんだ。

教室のど真ん中で、事件は起こる。

その申し出にどこかへ行くこうとしていた神納寺は呼び止められ、ど
うしたのかしらと言いたげな顔でこう続ける。

「仲吉君？あぁ、このクラスの子ですわねえ…。その人にいったい
何の用事がありますか？」

そのアイデンティティがふんだんにある口調と声のおかげで、教室の隅のほうにあるここからでも、十二分に彼女の声は聞き取れる。ゆっくりとうちのクラスメイトに歩み寄る。彼女の相棒であるGペンをしっかり右手に持ち、余裕ある態度を持つ神納寺はやはりどこからどう見ても貴族だ。

つてかなんだ、その普通の対応は。

「うん、仲吉君から借りた本を返そうと思って」

そんな謎な会話が俺の4メートル先で行われている。

「そういうことでしたの。本名を教えてくださいなくて？」

「あ、仲吉なかよし 優まゆみです」

だからなんなんだと、俺の頭上には「？」の文字が土砂降りのように降り注ぐ。

「わかりましたわ。では…」

そういうなり神納寺はなんでそんなところにあるんだと突っ込みたくなる場所であるポケットからインクを取り出す。

いや、百歩譲ってGペンを持っている神納寺がインクも持っているのは不思議じゃないでしょう。だが大事なことなので2回言わせて貰う。だからなんなんだ。

その言葉と行動が全くかみ合っていない彼女に俺は最大限気持ちは集中させてその結果の果てを見届ける。

「それでは」

神納寺はGペンに手際よくインクを付ける。そして机の上に乗っか

っているざらしにペンの先をつける

…？

「仲吉 優の居場所を教えたまえ！！」

ちよつと何を言っているのかわからない彼女の頭を本気で心配する。するとざらしにしみこんでいるインクがだんだんと浮かび上がった。きた。

…は？

「はっ！」

俺の発した言葉とは全く性質の違う『は』を一喝すると、浮かび上がったインクが飛び散る。

…は？

そして神納寺はなんの迷いもなく飛び散ったインクを目印に、丁寧になぞり始める。

目の前の光景が、ライトノベルの魔術師がよくやるような儀式のように見えてきた。

…あながちそれは例えでも何でもないかもしれない。

そんな神納寺のキチガイじみた行動なのに何故か筋が通っている神妙と呼ばずにはいられないその行動に、結末が迎えられる。

「…わかりましたわ」

額を拭った神納寺は、女子生徒になぞった紙を差し出す。

「わあ、流石神納寺さんね」

こんな奇跡を見逃しまいとちなまこになってそのできたてほやほや

の紙を凝視する。

「…?」

そこに描かれているのはなにやらなにかの見取り図みたいで、具体的になんの見取り図なのかはわからない。

「ここですわ」

神納寺は見取り図の右端に最初ペン先をつけたであろう、大きくにじんだ所を指さす。

「わっ、ありがとう！じゃあ、行ってくるね！」

クラスメイトは何がわかったのかちっぽけも理解できない俺を差し置いて、嬉しそうな表情を浮かべてさっさと教室から出て行った。

「急がないと、移動してしまいましてよー？」

神納寺がもはや呪文ではないかと懷疑してしまうような台詞を彼女の後ろ側から投げかけている。

落ちて着け…素数を数えて落ちて着くんだ…。

2…4…6…8…っておい。

偶数を数えてしまっている俺は全く落ち着いていないみたいだ。

この気持ちをぶち殺してくれる神薬を処方してくれるのは術を唱えた本人しかない。

メデューサの魔眼による石化を解除するのはメデューサの血しかない。

俺の目の前で超常現象を起こした彼女に俺はたまらず立ち上がり、彼女に詰め寄る。

「か、かか神納寺！」

「また達也はわたくしの名前を噛んでっつて…辻村殿!？」

いや、今のは噛んだ訳じゃないと弁解なんてしている場合ではない。喉から手が出てしまっているこれを押さえつけて欲しい一心で、素っ頓狂な顔を見せる神納寺に少し圧迫感のある言葉をぶつけてしまった。

「どうしたもこうしたもない！今一体何をした!？」

「な、な、なにごとですの？そそんなに大声を出されて…//」

なんでそこで『//』が出てくるんだよだなんて今は達也の存在くらいどうでもいい。

「今一体なにが行われたのかと聞いているんだ」

「な、何をしたっていわれなくても…。わたくしはただ人の居場所を教えてあげただけですわよ？なにもおかしいことは…」

重い荷物を持って歩道橋を上がるおばあさんの荷物を持って助けました…みたいなちよつとした親切心でやりました的な発言。

それどころか教室の周りにはいる人間も俺に対して生暖かい視線を突き刺しており、これではまるで俺がおかしい人のようである。

「それがおかしいんだよ！なにいきなりマジシャンもびっくりなこととしてかしてるんだ？」

別に俺は怒っているわけでもないのに、その余りに不可解な出来事に完全に混乱してしまっているせい、語気が強くなってしまう。

「あん…、つ、辻村殿…急にそんな…わたくしを…罵らないで…くださる…？」

愛撫もなにも、一切手を触れていないのになんでそんな艶めかしい声を出すんだよ、こいつはーっ！！

「つ、辻村君ー…！？」

突如背後から全力疾走して息切れをしたが、それでも息を吐き出しながら話す声が聞こえる。

それどころじゃないが、呼ばれたからには仕方がない。さつと後ろを振り返ると

「どー…どうしたの？ー…ハーツ、そんなに慌て…ちゃってっ！落ち着きなよ！」

そこには購買部からプリンを買ってきて戻ってきた栗崎が、肩で息をしながら俺の元へ寄ってくる姿だった。なにも走って帰ってくることはないだろ。

普段なら1階からこの4階までをこの短時間で往復してきた栗崎の体力を褒めたたえるところだが、今日ばかりはできそうにない。

誰も信じてくれそうもない虚言のような話を、できるだけ簡潔に栗崎へ伝える。

「栗崎聞いてくれ。神納寺こいつがおかしなことやって人の居場所を突きとめたんだよ」

親指をグッと突き立て肩の上までそれを上げ、後ろで若干頬を染めている神納寺を指す。

今の俺の説明さえなにいつているかわからねーと思うが…

「え？それって…あ！夏帆ちゃん！おひさしぶりですっ！」

え？

軽く流されるか栗崎のいつものテンションで驚いてくれるかの2つの選択肢しか予想できなかった俺には、その解答は新ルートすぎた。

「あらあずきさんでしたの。ごきげんよう、しばらくでしたわね」

明らかに知り合い以上の仲である2人のその挨拶に、『混乱』のステータス異常を抱えている俺へ更に追い打ちをかけてくる。
栗崎と神納寺が…友達！？訳がわからないよ。

「うんつ。三月の終わり頃にやった『ストーカーをストーカーして傍観しよう！』を一緒にやったの、あれすっごく楽しかったねっ」

ストーカーをストーカー？ 給炭機 ストーカーをストーカー？え？なに？
新手的カップリング？

「あれはなかなかスリルがあっっておもしろかったですわね」

「またやらない？今度は半径5メートルを目標にしてさ」

ああ ストーカー ストーカー 忍寄に忍寄ね。 いやいや。

「いいですわね、大いに盛り上がることまちがいな…」

「まー待て待て待てえ！話が逸れすぎだ！」

久し振りの再開で盛り上がることは大変結構だが、頼むからそれは後にして欲しい。

喉からでた手がさつきから疼いて仕方がないのだ。

話に栗崎が入れば、その話が混沌になることはわかっていたはずなのに、そんな常識すら忘却の彼方へ飛んでしまっている。ととととにかく軌道修正しなければ。

「栗崎、俺は神納寺がおかしなことをやって人の居場所を突き止めたのがおかしかったんだ」

改めて現状を説明して、共感を求める。

だが栗崎の返答は共感などではなく、真逆の反感を買う結果となってしまう。

栗崎の頭にくつきりと見えてしまうほどの『？』が浮かんでいるの
がわかる。

「え？なにかおかしなこと？いつものことじゃない？」

え…？

「え…？」

栗崎までそんなことを言う。

自分の頭上に過剰に上っていた血液が萎えてサーッと降りていくのがわかる。

だとしたら本当にそうだといいのか？

自分の今までの観念をぶち壊し、観念の臍を固めると言うのだろうか。

…あれか、俺はいつの間にか魔法が普通に使われている世界に紛れ込んだのか。それなんてドラえもん のび太の魔界大冒険？

もしも ボックスでさっさと元の世界へ！と高らかに宣言したい気
持ちで一杯だ。

「別におかしいことではないよね？夏帆ちゃん」

その同意に神納寺も当然と言った様子で栗崎の言葉に共感する。

「あずきさんの言うとおりですわ。これは辻村殿が眠いときに寝るよつに、普通のことでありまして」

二人の突いてくる奇異を見るような視線がこの現実が本物だと教えてくれている。

「なん…だと？」

にわかになににわか信じることにはできない。あえてもう一度言おう、訳がわからないよ。

キーンコーンカーンコーン

こんな時に限って…、時というのは残酷である。

「あらら！すみませぬがお二人とも、もう授業が始まります故これにて。では、ごきげんよう」

授業の開始を告げるそれを聞いた神納寺は、慌てて自分の教室へ帰っていった。

「夏帆ちゃんっ！バイバーイ！」

栗崎のその遊んだ友達に別れを告げる子どものような姿には、真っ赤に燃える夕日がバックにあれば最高だなとどうでも良いことを考える。

それにしても…

録画された動画を再生するがの如く、俺の脳裏には鮮明に神納寺の

ぶっ飛んだ光景が再生される。

Gペンにインクをつけて人物名を言いながら一喝したらその人の場所がわかった。

先程の光景を一行でまとめるところになるわけだが、やはり俺の価値観からものを言わせて貰うと、おかしいとしかでてこない。なんだかカレーにウスターソースをかけるとおいしいということを初めて聞かされたときの気分になる。

「まーまー辻村君元気だしなよっ、今日気付いて良かったじゃん！」
達也には劣るものの、完全に安心して神納寺が出て行った扉を注視していた俺に栗崎が慰め(?)の言葉をかけてきた。

「あ、ああ…」

しかしそんな単純にばつの悪さを一掃することなど、俺には到底無理だ。

しばらく俺は、放心状態だった…

「…っはっ！」

次俺が意識を体内に注入されたときには、黒板の上にある時計からして6限の授業が始まってまもないころだった

「ここで3をかけて…はい答えは2484だ」

初老の数学の先生が、淡々と黒板に答えを板書している。

…俺は今まで何をしていたのだろう…？

いまいち意識を覚醒できていないものの、神納寺のしでかしたこと

は記憶操作されたのかと疑いたくなるくらい輪郭がはっきりしている。

そこで俺は一つの仮説を思いつく。

…もしかしたら俺はさっきからずっと寝ていて、さっきの出来事も全て夢の話なんじゃ？

夢の話だと渴望したい程、あれは信じられない異空間での一幕だった。

俺のこの仮説を綺麗に証明してくれるものと言ったら、俺達の立会人であった栗崎の存在以外ない。

「くりさk…あ…」

質問一点張りでいこうと思って後ろの栗崎に首を向けた矢先、彼女は完全に爆睡していた。

ちくしょおおおお！授業中寝るなっていったのはおまえだろうがああああ！

腕を枕にしてうつぶせている姿を見て、これは真面目に授業を受けているという方程式を組み立てられるものなら組み立ててみる。

そんなものはフェルマーの最終定理…もとい、フェルマー・ワイルズの定理を証明したアンドリュー・ワイルズだって無理なわけだが、今すぐ答えが欲しい俺は栗崎に聞き出す以外で求めるしかない。

…そうだ、確か夢の中であろう栗崎はプリンを買っていた。だとすれば今の栗崎がプリンを持っていなければ俺の持論は通る。

逆に言えば、もし彼女がプリン持っていれば俺はボコボコに論破されて「ぐぬぬ」と狼狽することしかできない。

…確かめるしかない。

この話の終着点を栗崎のプリンが委ねており、そんなものに委ねられているのは実におかしな話である。

静かな寝息をたてて寝ている栗崎を見て可愛らしいと思ってしまう自分の情けない脳みそに辟易しながら、その周辺を見渡す。

もしなかったとしても食べてもう捨てたという可能性があるから油断でk…

…！ち…ちくしょおお！！

ダークマター暗黒物質を発見したとしても俺はこんな反応はしない。

どうして…！どうして貴様が居るんだ……プリイイイイン…！

彼女の後ろはクラスメイトがものを詰め込む鍵なし扉なしのロッカーが並べられているが、栗崎のロッカー中に悪夢ナイトメアの具現が、俺が最も見たくないモノが凄然としてあった。

夢だけど夢じゃなかった！

い…いやいや…た、たまたまだ…。偶然だ…。

けんじつ敵勢力が自陣りそつをほぼ壊滅させるが、まだ城しんじつは倒壊していない…

…！！！？

そんな燃え滓のような希望をもち、この授業を乗り越えようと前を向いた瞬間、その城も決定打たいぼつにより粉々にされてしまう。

大砲の弾となったのは、俺が脳みそにこれでもかとすり込んで記憶したあの紙。

か、神納寺が魔法をかけたあの紙が俺の前方にいるクラスメイトの机の中から…は、はみ出ているじゃないか。

これほど嬉しくない『はみ出し』はないだろう。

ただのインクがついた紙なのに、俺にとつては戦場へ赴くよう命令する赤紙にしか見えなかった。

これ以上俺は言い訳を、逃げ道を作る術を失ってしまった。

…

…我々は…認めなければならぬようだ…、彼女の…その…力を…！
…ここは開き直ってそういうことなんだと、言い聞かせるしかなかった。

「…」

隣を見ればそろそろ肉体に魂魄が戻らないと本当に天へ飛びだつて

しまう半死の達也が。
今ならあの姿になっても悪くないなど、そう思って盛大に溜息をついたのだった。

「はい！それではみなさんまた明日お会いしましょう！」

まかり先生の一日の疲れを吹き飛ばすような癒しボイスを聞いて現に俺は何だか肩が軽くなつたような気がした。
待ちに待ちまくった放課後になる。

どっと教室が騒がしくなる。

一日学校側による束縛から完全解放された生徒達は、各々この後の予定を話し合ったり、部活に言ったり様々だ。

帰宅部で予定も話し合う相手もない俺は完全に蚊帳の外ではあるが、達也の飼育の役目があるのであんまり気にしていない。

それにしても今日はいつも以上にバイタリティーを消費した。根源は神納寺のしでかしたことについて。

『特定の人物の位置を地図に描き出す程度の能力』を持つ神納寺…、
『地の文を読み取る程度の能力』を所持する達也とはまた別の意味で恐い存在だ。

でもそれはそれで面白いし便利な能力ではあると思う。

だが仮に付き合ったとして、仮に彼女がヤンデレ属性持ちならそれはそれは面白いホラーが書けることだろう。…書きたくないし神納寺はヤンデレでもない。

肩を使ってどんよりした息を吐き捨てて俺が飼育すべき相手を横目で見る。

この後の達也のテンションについて行けるか…。
ガタッ

『感電注意』の柵で覆われていた禁忌のスイッチが勝手にONに切

り替わる。

「今日もおわりましたー！お疲れ様でしたーっ！」

ビクンビクンと、早速ついて行くことを断念したくなる調子で今までずっと死んでいた達也が跳ね起きる。

例えるなら大量のガソリンに二トロをたらして一気にエクスポロージョンさして驚異的な推進力を得た車…いや、爆発による破壊力、か。

無理もない、ここ二時間本当の意味で何もしていないわけだからこいつの元気はありに有り余っていた。

精力と精神力を貪欲にドレインされて疲労困憊に近い俺とは完全に白と黒の関係だ。

「ヒューッ！ほうかごキターッ！」

『コロンビア』で正解してドヤ顔していたあいつのようなポーズを取り、みなぎる（迷惑な）活力を表している。

そんないらぬ元気をまき散らしている達也をおいしい具合に抜いてあげるのが俺の役目だ。一応釘を打つが、決して性的な意味ではない。

さて、飼育係としての仕事を全うすることにする。…と銘打ち弄って遊んでいるだけなのだが。

「こんばんわ。もう夜だよ」

最初は軽いジャブから入ってみる。

…のつもりがこいつには特大ストレートが決まったかのような釣れ具合な辺り、本当に今日のこいつは元気一杯みたいだ（棒）

チラツチラツと目だけを動かし、『なにそれ早く教えて!』という台詞待ちを露骨にしてきやがる。

そんな籠の中にエサを入れ、つかえ棒で支えて獲物が入ってきた途端棒を引きはがすようなちゃちいトラップに付き合いはしない。

「なんも期待してないからもったいぶるなよ…」

その返事にあからさまに面白くない顔をした達也だったが、直ぐに切り替えてトリックのネタばらしをする。

「なんと!可愛い子がレジ打ちしているんだよおー!!先週知ったんだ」

達也がニヤニヤしながらさういう。

…拍子抜け感が否めないというか期待はずれな話だったが、実に達也らしい話だ。

「…よくそこまでその子が働いている細かい時間帯を知っているな」
「は?俺を誰だと思ってるの?俺は狙った獲物は逃さないハンターだよ?HR6だよ?」
ハンターランク

ふふんと、勝ち誇り顔で達也は鼻で笑った。

それはP基準ポータルなのかF基準フロンティアなので随分その価値が変わるんだがと、問い質したところだが面倒な方向にベクトルが傾きそうだったので喉奥に言葉を飲み込む。

得意顔で顔でそう言っているが、要はその本屋で二時間粘着して彼女を見ている…という気持ちが悪い結果しか残っていないわけだ。
レジ打ちの女の子をみながらハアハアしている達也の姿を想像したが、速攻で気分が悪くなってきたからやめた。それなんてグロ画像?

「ハンター（笑）。ただのストーカーってことを自覚たほうが良いんじゃないか」

「す、ストーカーだなんて滅相もないわっつ！ たまたまその子が目にはいるだけだ！ いや！ 向こうが視線に介入してくるんだ！ きつとそうだ！」

こいつは幻聴だけでなく視線すら錯覚できることを決定づけた一言。

「可哀想に。もしお前がその子と視線を交わしてしまったら、忽ち石化してしまうわけだ。視姦乙」

「自主規制ピーがですね、わかります。全く、目だけで濡れさせてしまうとは…俺はなんて罪な男だ…」

どんな痴漢もののエロゲをやったらそんな発想がでてくるのだろうかこいつは。

「石化って言うのは暗に『牢屋』を意味していたんだがな」

「まさに視姦の罪で捕まったんですねわかりま…わからねえよ！ なんだよ！ 俺は歩く犯罪者か！？」

「よもや異論があるとは言っまい？」
「くっ…」

否定しろよ！

そこを認めてしまったらお前は本当にただの変態にしかならない。

「という訳でさっさと行くんだな。今はまだ4時半位だ」

十分遊んだのでちゃっっちゃとネタばらしをする。

「なん…だと？」

達也は額に汗を浮かべながらブラックボードの上にある一般的な円形時計に視線を合わせ今の時を知る。
というか外もまだまだ明るいんだからまだそんな時間じゃないって
気付けよ。

「な、何だよ脅かすなよお」

フウーっと、死ぬほど安慮したこいつは俺の胸周辺を肘でこのこのおと突いてくる。やめる鬱陶しい。

「ふ…ふふふ…」

すると安堵の顔が段々醜く歪み始め犯罪者さながらの不敵な笑み漏らしている。

そんな歪み面を晒しながら顔を上げた達也が少しずつ夕方に近づくと太陽をバツクに、親指を立てながら

「なあ…スケベしようや…じゃなくて、今からいつてみない？そ
の子のいる本屋へ。どうせ暇だろ？」

前半の台詞を抱きつきながら言われたら相手は達也でもわかってしま
うほどの鳥肌が湧き出すだろう。

聞いていただけの俺ですら悪寒が背筋を通り抜けたほどだ。なんて
恐ろしい奴なんだ…。

まあそこはいつものことなので置いておいて、達也の提案をどう調
理するか考える。

確かに帰宅部の俺は放課後やることがないし嫌でもない。

どうしようか…

- 1 行く
- 2 行かない

…と選択肢が出てきたが、達也ルートなんて存在しないため正直どつちでも良いわけだが、どうせなので…

「まあ、いいだろう」

軽く頷いて同意を示す。

こいつと付き合っていた方が、面白いことがおこる。いや、起こらないとおかしい。

「じゃさっさと行こうぜ。もうすぐ5時になっちまう」

もうこいついう普通の言葉にすらどんなボケがあるか探ってしまうのは飼育係としての職業病か。

「ああ」

授業が少ないこの時期は仕方がないことだが、薄っぺらい鞆を持って教室を出た。

達也とその店員がロリなのか熟女なのかというどうでも談義をしているうちにあっと言う間に到着した。
オレンジ色に染まりつつある商店街は、俺に夕方であることを実感させてくれる。

地上では仕事帰りのサラリーマンや買い物にきた主婦でそこその

にぎわいをみせている。

そんな人の流れを傍観していると、達也が口を開く。

「流石に急ぎすぎたかな…」

達也が苦笑しながらそう言う。

こいつは一刻千秋の思いを唾棄したためかつい足が速まったらしい。ついて行く俺はなにも思わなかったが、相当早く着いたみたいだ。

商店街の広場にそびえ立つ時計をのぞくと、時刻は5時の15分前。その子がレジ打ちにはいるまでまだ時間がある。

「やれやれだぜ…俺は特に本屋には用がないんだがな」

「じゃあ、少しどこかで時間を潰す？」

こういう普通の言葉にすらどんなポケg（ry

「そうだな…」

1 本屋

2 文房具屋

3 ゲーセン

2は栗崎ルートのフラグ通過点だが、突入する気はないのでこれを選ぶ。

「仕方がない。適当に雑誌よんで時間を潰すか」

ここ最近俺は本屋という所に足を向けた記憶がない。最新の本事情を知るという意味で行くことに甲斐はある。

そう指針を決めると達也がお前だけにはされたくない蔑むようなげんなり顔でこう言った。

「『ざっし』って…えっちな本読んで死ぬんですか？」

「お前が慚死しろ」

「えっちいのは嫌いです（キリッ）」

どの口が言うんだよ…

「いくぞ」

「待つて…っ心の準備が…」

看過して通りの中程にある本屋に向かう。

決して達也との歩幅を合わせているわけではないのだが、単純に疲れているためかその足取りはどうしても重く、結果的に達也と並んで歩く形になる。

だらだらと歩いていると、学校帰りの生徒が和気藹々としている姿を何度も視認する。無論うちの学校の生徒の姿も見受けられた。

「70点…んー、あの子は63点……ん、あれは80は超えてるな」

隣で聞いて欲しいのかわからないが、ブツブツ呟きながら後ろを歩く犯罪者が。

いるよな、主観だけで点数を付ける馬鹿が。…ちょっとだけあいつの基準が知りたいところだが。

そんな事を思慮しながら足を進めると、目的の本屋が露わになる。

「ふう…最終決戦の場にしては少々お遊びが過ぎていないか？…フフ…『喜劇は終わった幕を引け』…と言いたいのか？」

そのキャラまだ引きずっているのか。いや、俺も好きだけどさ。まあ、とりあえず中にはいることにする。

『いらっしやいませ』の文字が真つ2つになる自動ドアを潜れば、視界一面に本が姿を見せる。

流石この商店街に唯一存在し、商店街売り上げNO.1の本屋といったところか。

なかなかの広さと物量だ。店内は本で埋め尽くされている。

客の出入りもなかなかで、店内は常に人を確認できるくらいの混み具合だ。

天井からつり下げられたプレートには各コーナーのジャンルが書いてあった。一般小説、絵本、参考書etc…

その中でも俺は入り口直ぐ目の前にある『新着図書コーナー』に目を引かれる。

今は一体どんな本があるんだろうという、純然に興味本位からの誘因だ。

うむ、どれも好奇心が震えるくらい撥ってくるものばかりだ。どれか買ってもいいのかもしれない。

「お、ワンピース97巻じゃん。いつまで続くんだろうな、これ」

活字が読めない達也は漫画にしか興味がないらしく、次々と色々な漫画の表紙を見ては変えていた。

「そんな君にはこれだ」

会話のキャッチボールをする気の欠片もない返事だが、達也には繋がっているからそこんところは非常に楽だ。

「あーん？…っておい！これはノンタンじゃねーか！いくら俺が阿呆だからってこれは馬鹿にしすぎだろ！？」

「甘いな、これは大人の雑誌だ」

「!?!」

どう見ても児童書なこの本がアダルティなものだと聞いた刹那達也は戦慄する。

「見る、18禁のマークがあるだろ？」

俺が指さす先には例の両手を突き出してらめえしているマークが。

「…なん…だと…?」

能力を使っていたと錯覚していたことを指摘されたときに主人公が見せたような驚駭を隠しきれない達也だが、正直に言つと俺が一番驚いている。なんだよ18禁のノンタン って。

タイトルは『ノンタンちのあわぶくぶくぶぶぶ』という、どこのAVやジョークグッズのエセタイトルだよ。一瞬オリジナルと見間違えたわ。本当は『ノンタンあわぶくぶくぶぶぶ』な。

この本を開くのは人間をやめるときではないかと当惑したが、求知心がそれを上回ったためパンドラの箱さながらなこいつを恐る恐る開く。

表紙はオリジナルと多分同じだ。

達也も気になったのか漫画を置いて俺の本に視一視する。…

な…!

適当に開かれたそのページにはノンタンが「たつやくん、こつぱみじんになってどうしたの?」と血文字で書かれた台詞と、マインスロアーを肩においた血のりだらけのノンタンがたつやくんの肉片を蹴り飛ばす姿が。

「台詞と行動が伴ってねえよっつ!?!」

達也が出目金を凌駕する程目を突き出して全力のツツコミをする。

「最もの極致を極めたツツコミだが、そのツツコミは少しずれていくだろ!？」

地の文と台詞を同時に満たしたところで冷静にこいつを分析する。

こ…これは酷い。表紙の精巧な再現の因子により、間違って買ってしまった親は少なからずいるはずだ。子どもにトラウマを植え付けるにはうってつけすぎて怖い。

そもそもノンタ ンって動物や虫ばかりなのにたつやくんって…、偶然とは思えないこの名前に悪意しか感じられない。

「もしかしたら俺が無為自然にこれ描いて出版したかもしれんな」

あながち冗談でもない事をせせら笑いながら漏らすとなかなか鋭いツツコミが返ってきた。

「無意識で俺を木っ端微塵にするお前はどんだけ俺に怨念持ってるだよ!」

「ごもつともで。

訴えられても仕方がない(俺が)ノ ンタンを元の場所に戻す。

「ちょっと時間巻こうか。もう400行超えてこれ以上続けるとggaggdになっちゃう」

迫真顔でとんでもないメタ発言をする達也。確かに今までは400行以内に収めてはいた。

ページ数を気にするお前はブ ラックジャックか、とちよつとわか

りにくい比喻でどっぴろつと考えたがやめる。
そもそも最初からgggdしているこれに今更何を言っているんだ
というのが俺の見解だが。

「そつだな、ちょっと急ごうか」

前中後の区切りはもうちょっと考えてやれよと思惟しながら、定位
置に着くぞ、となにやらそんなところがあるらしいので黙って達也
について行く。

「ここだよ、ここ」

不意に達也が立ち止まる。無論ここは本屋の中である。

場所的には本屋の中核に位置するギャンブルに関する本が雑然と並
べられているところだ。

時間が時間なのか他の客がいないのでその辺りは助かった。

「ここはギャンブル関係の本があるが…ここがなぜ定位置なのか説
明を求める」

「百聞は一見に如かず…だ。本棚の上からのぞいてみる」

達也の言われたとおりにする

「ん…」

本棚の上から覗くと、向こうにはレジをこなす定員が正面から見え
る。言われてみればここなら視線が悟られにくい。

今いる大学生くらいの女の店員は達也の視姦の対象外らしい。彼女
は次のシフトへ仕事を託すためか忙しくあれこれ動いている。

「な？」

ドヤ顔の申し子であるこいつはニユーニユートラルフェイスでグツと親指を立てる。

二次元だけでなく三次元まで「ド」のつく変態のレッテルを貼れるこいつはある意味グローバルな存在なのかもしれない。

「お、おい、店員が戻っていくぞ…ふっ！ふっ！」

達也が興奮した面持ちでいる。

それに釣られて棚上から向こうを見ると、レジ打ちを担当していた店員が待機室へ戻っていく。

どうやら交代するようだ。

「そろそろくるぞ。覚悟しておけよ？彼女の可愛さをみたら鼻血でるぜ？」

どこの少年漫画だよ。

まあそこまでその子に興味はないので、適当に目の前にあるギャンブル関係の雑誌に手をつける。

ほう…今週新台が入荷したのか。

「…！！」

食い入るようにレジを見ている隣の達也の表情が変わった。どうやらおでましたようだな。

達也にあわせて奥を見る。

「…！」

そこには、確かに他の女の子とは別のオーラがにじみ出す女の子がいた。

青紫髪のショートカット、鋭い瞳、その瞳の下に光る楕円形の眼鏡をもちあわせる傷一つ無い顔。

いつてしまえばつり目の長門 である。…これでかなり楽に想像できるんじゃないだろうか。

そんな可憐と言うよりは美麗というほうが正しい少女が目強く映る…って

あれはルートの調合性がとれないから隠しヒロインに追いやら…
EXルート栗生野さんじゃないか。通常ルートにそんな姿で出張とは。

俺が彼女のその働きっぷりに感心していると

「フヒ…フヒヒ…」

達也が場違いな環境音^{はないき}をだす簡単なお仕事モードに移行する。つまりそれは達也が無抵抗で無意識で無自覚になることを意味する。

昨日明日香と対面したときと何も違いない状態で、一向に目を反らす気配がない。

その視線だけで触手プレイが可能なねちゃねちゃした視線をずっと彼女に浴びせていたら気付かれるのは実に容易だ。

「ふごふつ!?!」

一発裏拳を達也の胸に浴びせる。

かいしんの いちげき!

裏拳でよろめいたところで達也の耳をひっぱり、自分の口に寄せる

「そんなにじろじろみていたら気づかれるだろアホ。少し自重しろ」

「わ、わかったのだ…」

達也も真下にある雑誌を取り、パラパラとページをめくる。

…
幸いなのかわからないが粟生野は全く気付いた様子はなく、置物のようにピクリとも動かず立っている。流石訓練されていることだけはあはる。

…いや、訓練されていたらこの色がある視線もばれているんじゃないだろうか？

「ふう、筋肉のおかげで助かったぜ」

そう危惧している俺とは裏腹に筋肉を褒める馬鹿がいた。…勝手にするが良い。

こうして達也のチキンレースが始まったのだった。

…
…
…

…あれから10分は経ったが、状況はなにも変わっていない。

達也が彼女を見ては雑誌を見て、彼女を見ては雑誌を見るの無限ループを繰り返しているだけだ。

やきもきに耐えられなくなった俺は、ついに我慢していた口を開く。

「さっき視姦と冗談で言ったつもりだが、これじゃ本当に視姦だな。これ以上お前が見るとあの子を孕ませることになる」

「ふっ、それができれば本望…さ」

「というかお前ただ見ているだけなのか？」

本当に見ているだけなのかこの台詞で煽ってみると、いつもの憎たらしい顔が凍結する。

「う…」

どうやら狙っているらしい…のか？

ここは友人（仮）として、一肌脱いでやろうか。

「これだから童貞は。狙ってんだったらもつと積極的にいかないのだめだろ」

「どどどど童貞ちゃうつちゆうに！俺は種馬な草食男子なんだよ」「矛盾しているだろそれ…。いや、つまり、一人ホールで種付けしているっていいたいのか」

「うつせえバーカ！その通りだよいわせんな恥ずかしい」

なかなかのこの下ネタを不快に思われた方へこの場を借りてお詫びする。

何がともあれこいつは手が出せないみたいだ。なかなか可愛いところがある。

よし、慈愛の神がこの童貞野郎に自分のことは棚に上げて介抱の手続きを取ってやる。

「馬鹿か。あの子は今何をしている？レジ打ちだぞ？お前がなんか本を持っていけば会話のチャンスなんて簡単に作れるだろ」

「おお！その発想はなかったわ」

パツと表情を輝かせ達也が右の掌にポンツと左手を乗せる。どう考えても最初にこの結論が出るだろ…

「ほら、この本を持っていけ。こいつを会話の種にするんだな」

達也に顔を覆えるくらいの正方形に近い一冊の本を渡す。

「ありがとう紅…ってさっきのノントンじゃねーかあああああ
あ！！」

言わずもがな『ノントンちのあわぶくぶくぶぶぶ』である。

「さっきお前が放心している間にとっておいたんだよ。そんな男らしい本を買いにいけば相手はお前に好印象をもつぞ」

「絵本を買う高校生か18禁の誰得なグロ本を買う高校生かに印象が限定されるこれじゃ俺のイメージはガタ落ちしかねえよ！！」

それくらいの常識を持っていることに驚きだ。

「じゃあこれだ」

ノントンを受け取り、代わりに左手に持っている本を渡す。

「今度はエロ本じゃねえか！しかも俺好みのロリ本！！欲しいわ！
！じゃねえっつ！ストレートすぎんだろ！！」

ノリツツコミまでこなす達也の姿をみて、飼育係としてここまで成長したかと感動すら覚える。

「…わかったよ。この小説なら文句はないだろ」

初代ゲーム　ボーイと重なる大きさの、ハードカバーの小説を渡す。

「なんだこれ？タイトルは…」もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの愛する『シャブ』を使ったら？』？」

これまた企画ものAVにありそうなエセタイトル。ドラツカーの意味が180度違う。

「適当に持ってきた。特に深い意味はない」

「そうかい。まあ、さっきの二冊よりは遙かにましだな」

周りの料理の値段が高くて、それより少し安い料理が他の店なら高いのに安く見えてしまうアレと同じ現象が発生している。とはいえ、売れている本ではあるので大丈夫ではあるが。

「…で、これを出してどうするの？選択肢でないからどうすればいいかわからないんだけど」

惚けた顔で聞いてきやがった。エロゲ脳の元型アーキタイプを所持しているだけはある、現実リアルに選択肢を求めるとは。

割と真面目なアドバイスをしてみることにする。

「とにかく冷静に、落ち着いて話せ。まずは、そうだな。身近なことから話せ」

「いい天気だね。とか、最近どう？とかかい？」

「そうそう…まあ今日は一回目だ、今回はそれくらいで良いと思うぞ。踏み込んだ話はあと2、3回彼女と会話した後だ」

なんで俺本屋のど真ん中で女の子との会話の仕方（初歩）をレクチャーしているんだろう…ああ、宿命か。

そんな自問自答をしていると意外にもちゃんと傾聴していた達也が一つなにかを納得したらしく、頷いた後戸惑いが混じる声でこう言った。

「つまり…『働くオンナノコは美しい』の岬光みづみ宙むすぶちゃんちやんルートの序

盤と同じって事なのか…！」

…前言撤回。エロゲのルートで重なっているキャラを探していたとは…これには溜息をつかざるを得ない。

その通りわざとらしく肩をすくめ体内の空気を抜くように長い息を吐く。

「ああもうそれでいいよ」

「お、じゃあ行ってくるぜ！」

前例を発見した途端元気になりやがったこいつに侮蔑した視線を突き立てるが、まあ何がともあれやる気があるのは良いことだ。

「おう、ミッションスタートだ！」

俺も適当なノリでそう言ってこいつが作戦失敗するのを見守らせてもらう。これほど頼りない兵士がいようか、いやいな。

粟生野という城をたった一人で攻城する達也…。悪いが犬死にの末路しか思い浮かばない。

駄目だとわかっていても部下を特攻させる判断をしないとイケない指揮官というのも、つらいものがある。…ええ嘘です。

「すすいません」

「はい」

そんなお涙頂戴展開を妄想しているうちに達也はレジにつき、攻城を開始していた。

対する城は無表情だが、透き通るような声で敵の出方を伺う…とい
うのはこちら側の一方的な解釈だが。

それにしても彼女の声はまさにクリスタルボイスそのものだ。ここ

から聞いてもはっきり聞こえる。
達也が先制攻撃を仕掛ける。

「今日はいい天気…ですね？」

「そうですね」

…が簡易にさらっと受け流し、本を手に取り読み取りリーダーでバーコードを認識させる。

「630円です」

「このバイト…大変そうだね」

達也にはよく頑張っている。強大な城に対して抗っているものの、彼女は何枚も上手にいた。

「大変です。630円です」

Sランク級のスルースキルを遺憾なく発揮し華麗に流す。「客」と話す気などこれっぽっちもないのか、「達也」と話したくないのか。前者だろうが後者だろうが状況が悪いのは見ての通りだ。

「あは、はい！」

この劣勢の雰囲気完全に飲まれた達也はまごまごしながら財布をあさり始め、小銭を出す。

これはひどい…

「これはひどい…」

つい本音が口に出すが、これはどちらに対しても、だ。

しかし今の今まで時が止まったように身体をぴくりとも動かさず無表情な店員のほうに意味合いは傾いている。これは達也が云々の前に態度が悪いな…せめて営業スマイルくらいしろよ。

いくら隠しキヤラだから達也とフラグを立ててはいけないからってこんなにあんまりだ…と半分達也に同情していると図らずも達也が身体を正面に向けながら振り返りってきた。

「…」

それはわかりやすすぎるほどの半泣きで、ヘルプサイン以外の何者でもなかった。

だが無慈悲な司令官はGJを意するグーサインの親指を首に近づけ、平行にスライドさせる。意味的には氏ねってことだ。

うぐうとお前がやっても可愛いも糞もない顔つきになった後、正面をむき直した達也は一矢報いようと思ったのか、こんな言葉を放った。

「そ、それにしてもきき君可愛いね」

元々開け閉めできないんじゃないかと錯覚するくらい硬い感情の城門へ捨て身タツクル。

そんな事をしてしまうくらい敵に囲まれて絶体絶命な達也に真の無慈悲な王妃はトドメを刺す。

「630円丁度お預かりします。こちらがレシートです。有り難うございました」

スルウウウウウウウウツツツッ！

きつと達也も意中でゴールを決めたときハイテンションで叫ぶサッカー実況者のようにそう思っただろう。

彼女は完璧に、忠実にプログラムの命令通りに従ったようになんの感情も込めずにただただ、透き通った声で受け答えの定型文をいった。

「……………あ、ああ」

差し出される紙袋を受け取った達也は、文字通りこれ以上言葉は出なかった。

oh…

俺の所に戻ってくることもなく店から出て行く達也。

後続く。

ありがとうございましたー…とこれは粟生野以外の店員が言った台詞だ。

自動ドアを潜り抜け外気を吸いつつ達也を探すと

右手にある楽器屋のショーインドウのなかにあるトランペットをなめるように見ていた。

「…ふ…フフフ…」

「残念だったな」

そう話しかけると達也は珍しくも苦笑いでこちらを向いてきた。

俺の記憶を漁りに漁る限り、こう冷徹にされるとこいつは「ぞくぞくするよお！」と言いながらマゾヒスト全開の恍惚とした表情を浮かべているかと思ったのだが。

「ふふ…流石にDMな俺でもこれには堪えたわ…」

「今の気分を例えるならさっきのノ…ンタンのシーンと同じか？」

フる。

そしてこういうときだけは察しが良い達也は期待通りの解答をする。

「あ？…ああ…栗生野ンタンが俺の心を木っ端微塵にしたんですね。…ってただのシヤレじゃねえかああああああああ！！！！」

またこんなオチかよ…

しかし日常パートで達也オチは便利なので今回もそこにあやからせてもらおう。

深翁商店街は今日も平和だった。

4月4日/火曜日(後) (後書き)

という訳で後編終了です。

神納寺のあの能力は口調からでもわかるとおり、キャラ付けに必死になった結果の産物です。他意はないです。本当です。

さて次回から不穏な影が現れてきます。後ずっとジメジメした展開が続くので神納寺、達也、栗崎でなんとかフォローしようと色々画策中ですが…難航しております。

ヒロインがヒロインらしくなるまで、しばらくお待ち下さい。

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月5日/水曜日(前) (前書き)

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで前編です。

当然のように500行超えるグダグダな文章になっていますので、
お気を付け下さい。

ようやく物語に動きがあります。

それでは、どうぞ！

4月5日/水曜日(前)

「ただいまーっ！」

「おかえりー！」

「今日もいっぱい遊んできたね」

「うん！僕、今日もホームラン打ったよ！」

「あらっ、本当なの紅ちゃん！すごいわねっ」

「じゃあ、今日の夕飯には、辻ちゃんの好きな唐揚げを入れないとね！」

「うわあい！ありがとう！お母さん！！」

「じゃあ、先にお風呂に入ってくるねっ」

「紅はお外から帰ってきたらすぐお風呂に入ってくれるから助かるわ」

「うんっ！」

「さっぱりしたーっ！」

「おーっ。さっぱりしたなーっ！」

「おとーさーん！」

ガバッ

「おおー！今日は大胆な登場だな！」

「だってお父さんが帰ってくるの、久しぶりなんだもの！」

「はははっ。久しぶりっていつても、三日ぶりだぞ？」

「長いもん！僕、大好きなお父さんを毎日みたいもん」

「ははは。まいったなあ。よし、今週の日曜日は休みを取って、家族で遊園地でも行くか!？」

「え？本当!?!うわーい!!」

「ちょっとお父さん、明日香はどうするの?」

「大丈夫だ。明日香の外出許可を、俺がとっておこう」

「うわぁいー！楽しみだなーっ!」

「そつだな、思いっきり楽しもうな!」

原文のまま掲載させて頂いた。

シリリリイッリリイリリリリリリイリイリリ!

意識覚醒装置めいせきがその役目通り俺の睡眠を妨害しこつちの世界に引きずってくる。

五月蠅いので止めてもう一眠りで行こうか。…こうやって俺は寝坊することといい加減学習するべきだが三大欲求の一つ、睡眠欲に打ち勝てるほどの強い意志などない。

…一応時間だけでも確認しておこう。

ハンマーでベルを乱打する年期が入った目覚まし時計のスイッチを平手で叩きつけ、この部屋に無音を呼び込み、ゆっくりと刻まれている時間を確認する。

「ん…もう5時50分か。寝過ぎたなあ。今日は学校いけなかったな」

なぜかボソツとそんな言葉が出てしまったが、生憎朝の5時50分だ。所謂早朝であり、決して夕方のではない。

じゃあもうひと眠り……

…時間を確認ができるほど眠気が覚めてくると、先程まで上映されていた夢のことを思い出してしまった。

またこの夢か

もう何度見たか数えるのを諦めるほど、頭の中のフィルムが擦り切れるほど見てきた夢。

あの頃の父と、まだ健在だった母、もう入院はしていたものの外出許可をとることができた位元気だった妹。この4人でそれはそれは幸せそうに暮らしていた頃の夢。

俺の今の願望をそのまま見せてくれているように思えるが、夢の内容は紛れもない現実だった。

あくまでそれは過去形であり、過去の出来事だ。

今なんだ？この家には俺一人しかいないじゃないか。

一体どうして、こんなにもバラバラになっちゃったのだろうか。一体どうして、俺はこんなにも寂寥感を味わなければならぬのか。この残酷なまでの現実を突きつけられ、ぶつけようのない怒りすら湧いてくる。

だがぶつけようのないのだ。ぶつけようのないから更に苛立ちがこみ上げてくる。

…ハア

唯一の逃げ道である深い深い溜息を一つついたら、同時に眠気も奈落の底に突き落とされていた。

決して睡眠不足からこない気怠さを抱えたまま、のそのそとベットから出る。

こんな気持ちのまま寝てしまったら、それこそ泥のように眠ってしまっただろう。

身支度をすませ、学校へむかうことにしよう。

「行つてきます」

そうやって今日も永久に話しかけてくることのない分厚い鉄板…もといドアにそう述べて鍵を閉める。

時刻は6時半を回るか回らないか。学校が始まるまでまだ1時間半ある。

そんなに早く行ってもやることはないが、言わせてもらえば家でもやることはない。

父が自分が小学校に上がる辺りに建てた立派な二階建ての家は、4人ですら少し広いのに1人で過ごすだなんて孤独感を募らせるだけだ。

それに早くでて周りの景色を堪能しながら歩いて学校に向かうのが、

最近の楽しみでもある。

同時に夜中に入れ替えられた空気が、俺の頭を囲むこのでつぶりと肥えた暗雲のような沈んだ気持ちを洗い流してもくれる。

その他早く学校に着くと普段見られない光景が見られるのも、早く出てくる理由に挙げられる。

野球部の朝練、教師同士が談笑しながら学校へ向かう姿、静まりかえった学校、まかり先生の寝ぼけた愛らしい顔… e t c … 違った一面が見られる。… 最後は余計だったな。

とにかく俺は足を止めることなく学校へ向かう。

あつという間に桜の社員が等間隔で俺を出迎えてくれる。この社員がまた全員綺麗だからある種のキャバクラに来た気分だ。

社長である俺は、そんな並べられた美麗な嬢たちのど真ん中を一人一人顔を確認しながらゆったりと歩くことにする。

この時間帯にこの道を通る生徒はいなく、完全貸し切りでこの空間を独占できる覇権を得たことによる優越感もまた格別だ。

まだまだ現役の満開の桜たちを見ながら、ゆつくりと学校へ続く道を歩く。

「っはー…はー…」

…とはいえ、そんな気分を感じることがするのは学校の入り口までで、学校に入った瞬間俺は一人の生徒にクラスダウンし、当然のように階段を使って我が教室を目指す羽目になる。

折り返し地点である2階に到着し、3階に足を踏み入れるときには、引きずる倦怠感が足に重りを付ける。

階段以外で上る手段と言えればエレベーターがないこともないが一般生徒が使って良い代物ではなく、否応なしに段差を上ることを強いられる。

まあこんな朝早くだったらバレないだろうという悪魔のささやきが聞こえてくるが、少しでも体力維持の糧にしようと思い、結局は階段を使う。

そんな事を思っているうちに、ようやく4階に辿り着く。

静寂に支配された廊下に俺の足音だけが響き渡り、それが止むことは教室に着いたことを意味する。流石にこの時間帯に誰も来ていないだろう。

だが、淡い期待を打ち砕くヤツがいた。

ガラス

「うーっす」

そんなやや恥ずかしい事を言いながら教室の中に入る。勿論これは人影はないと想定したか「……!?」

俺の視界には多少は歪みながらも規律を保って並べられた学習机のみと想定していたのに、その中に生物が一人紛れ込んでいるじゃないか。

誰もいないと思われた教室の一角に、一人の少女が机に突っ伏して心地よさそうに眠っている。

「スー」

なんとそこには元気っ子兼馬鹿っ子兼俺の席の背後にいる兼神納寺の友達兼元ヒロ……な女の子……栗崎！

「栗崎…！」

彼女の名前を口に出さないで一体いつ出せばいいんだ。

どうして栗崎がこんなに早いんだ！？

例え仮に誰かいたとしても、栗崎と達也だけはこんな早朝にいるはずがないと思っていたのにその幻想はぶち殺されたみたいだ。

まさか彼女が一番早く来ているとは…

初めて『うさぎ とかめ』を読んだとき、絶対うさぎが勝つと踏んだら、まさかのかめが勝ったときのあの驚き桃の木山椒たんじょうの木に似ている。

驚きを隠せない俺とはコインの裏表のように、栗崎は相変わらず気持ちよさそうに眠っている。

起こして訳を聞こうと思ったが、死んだネロのように安らかに眠ってる姿を見ればそんな気持ちも萎えるというものだ。

「やれやれだぜ…！」

起こさないようゆっくり栗崎の前にある自分の席に座り使用して三年目のぼろぼろのカバンから教科書類を取り出して机の中に詰め込む。

よし…準備は完了。黒板の上に掛けてある時計をみれば、まだ40分近く時間がある。

「スー」

しかしこんな無防備に寝ているとは…少しは自分が可愛いと自覚した方が良く。将来こんな姿を帰りの電車ですらやってみろ…きつと

『へへへ…誘ってんだろ？』…と自意識過剰な変態たつやが群がること請け合いだ。

つまり俺が言いたいかつて？勿論可愛いはsry
…と、栗崎の寝顔をみながらそんな事を思ってしまう。

「…」

…
…なんだこの寂寞は。ここはスピーカーの周波数特性を観測する無響室か。

とにかく暇だ。誰かと話しをしようも現在この教室には栗崎以外誰もいない。

こういうときだけ達也は重宝する。あいつと共になにかをしていれば少なくとも退屈という文字をかき消すことができる。

自分でできること、例えば勉強なんかがあるが当然する気なんてさらさらない。この世界にテストなどない。

そんな状況の中、俺がやることと言えば…

1 栗崎に習って寝る

2 栗崎を起こして話し相手にする

2はなんて自分勝手な選択肢だろうと我ながら思うが、今回はこっちを選ぶことにする。

…やはりこんなに早く来た理由が気になる

栗崎みたいなキャラは朝遅刻しそうになってパンをくわえてながら通学路を爆走するようなやつなのに。

俺のように景色を楽しみながらくるようなやつでもないと思う…それは流石に先入観にとらわれすぎが。

とりあえず聞いてみるほかにこの疑問を取り除く治療法はない。しかしこんな安眠している彼女を起こして良いのか？俺の欲望を満たすためだけに彼女の眠りを妨害して良いのか？
「つてかさつき起こす気持ちも萎えるって思ったばかりじゃないか。しかし選択肢には逆らえない。それがプレイヤーの意志だというのが、俺は例えナイル川に泳ぎにだって行かなくてはいけない駒だ。栗崎には悪いが話し相手になってもらうことにする。問題は起こし方ではあるが。」
さて、栗崎を不快に思わせずに起こす方法といえば…

- 1 肩を揺すって起こす
- 2 大きな音を立てて起こす
- 3 ハリセンを作って、突っ込みながら起こす

どうして当時こんな謎の選択肢を作ったのだらうとつくづく疑問だが、今回は強制的に1を選び、簡略化する。

ここは一般的な起こし方で起こすことにする。
彼女の肩に手をあて、揺する。

「おい栗崎起きてくれないか」
「スー」

栗崎 には こうかない ようだ …
どうやら栗崎の眠りの装甲は相当厚いと見た。これじゃハリセンだ

ろぅが達也の奇声だろぅがお構いなしに眠りこけることだろぅ。
しかしここまで俺の予想通りだ。俺にはまだ奥の手が存在する。
そう、物理的駄目なら精神的にアタックしてみる…といったものだ。
彼女がこの世で愛するもの…それは『プリン』である。
彼女 プリンでもなんら不思議ではない。…ニアイコールでとどま
っている辺りが俺の自信のなさを表しているが。
とにかくこの単語を彼女に発すれば忽ち彼女は昏睡状態から通常状
態へステータス回復するだろぅというのが俺の算段だ。
俺は彼女の耳元まで顔を近づけその魔法の言葉を囁きかけようとす
ると、彼女が纏っている甘い香りで逆に俺が魔法をかけられそうに
なる。

「ぐ…」

ぐ…だが、この程度でやられる俺じゃない。べ、別にオンナノコに
慣れていないからこんなに魔法が効いているというわけでは決して
ない。絶対にだ。

彼女の固有結界による精神攻撃で朝っぱらからたじたじだが、なん
とか言うことができた。

「プリン」

詠唱を完了させる。 たった3文字のこの言葉だが…

「ううん…ぷ…プリン…？」

彼女を現実には召喚するには十二分すぎた。

ごそごそと体を左右に揺すりながら栗崎の頭が枕を作っていた両手
から引きはがされ、半目でこちらを見てきた。

彼女のデコには腕枕をしていたことを証明する赤い紋章…もとい赤

い跡がついている。
ポーっとしながら俺の存在を認識したらしい栗崎は、若干の掠れ声でこう言った。

「んにゃ…あ…辻村君…おはようっ」

畜生寝起きでも可愛いだなんて一体どうなってんだよ。

「おはよう」

んんーと目を擦りながら完全に体を起こし、口元をむにゃにゃとさせる。これは5分10分の眠りから来る動作ではない、益々彼女がいつ来たのか興味が湧いた。

「んー…、とりあえず顔洗ってくるね」

そう言うなり彼女はS字を描きながら立ち上がり、昨日プリンを買いに行ったときの俊敏さは皆無な動きで水道へ向かっていったのだ。

「…それで、どうしてあたしを起こしたのかな？」

席につきつつ四月のやや冷たい水で睡気を打破した栗崎がまだちょっと残る眠さを付け合わせながらそう聞いて来た。

「いや、他に話す相手もいなかったし、ちょっと聞きたいことがあったな」

正直起こしてしまったことを後悔している。反省はしていないが。

「えー？なにになに？辻村君があたしに聞きたいことって…もしかして好きな冷蔵庫？」

は？

そんなことをはにかみながら聞いてきた。そこに興味はない。

好きな『人』ではなく『冷蔵庫』がこの18歳の思春期少女からよもや発せられるとは誰も思っまい。

「え？いやそんなn…」

「そうだなあ、あたしはKA93W - 225Z型が好きかな？あれ瞬間冷凍機能がついていいよ」

スタンド名『我世界』くらやみ・サ・ワールド。相手は死ぬ。

まずい、こいつを発動されたらこのままでは完全にペースを栗崎に握られてしまう。

なんとか掌握仕返さなければ俺は死ぬ。

「栗崎」

「そのほかにも10分で氷が…ん？どうしたの？」

「俺が聞きたいのはそれじゃないんだ」

真面目な顔を作って彼女の暴走を食い止める。

「ええ？そうなの？」

ここで相づちをうつてはいけない、また話が明後日の方向に飛んでいってしまふ。

「どうしてこんなに早く学校に来たんだ？」

話が飛んでいく前に早めに核心に迫ることにしなければ栗崎の猛々しい驚わたいに話の腰を驚わたいつかみされてぶっ飛ばされてしまう。…いっておくがギャグで言ったつもりはない。

「それはたまたま早く起きたからだよーっ。二度寝するなら家より学校の方が安心じゃん？」

なにかもの凄い重大な理由があると思っただが、そうでもなかった。…考えてみれば来て寝ている時点で何かをしに来たわけではないとわかるようなものなのに、無理に起こしてしまう結果を残してしまっただ。

これは彼女に悪いことをしてしまった。俺はいきなり起こされても一切文句を言わない彼女に対して申し訳ない気持ち声をに出した。

「そりゃそうだよな。ごめん、起こして悪かった」

素直に謝る。

「いやいや大丈夫だよっ？さっきからずっと寝ていたからもう眠気もないよ？」

小首をかしげてそう言う彼女は、まるでどうして俺が謝ったのかわからない体だ。

その心の寛容さに俺は涙するしかない。

「そう言ってもらえると助かるが…。とりあえず謝っておくよ」
「大丈夫だってば！のーぷろぶれむだよっ」

ガッツポーズをして白い歯をくつきり見せる破顔一笑は、どんな絶望に打ち拉がれていても立ち直らせる事ができる国宝級の笑顔だ。俺も釣られて顔をほころばしてしまう。

「うんうん、結構結構。別に夢を見ていた訳でもないしっ」

夢…か

俺がその単語を聞いた途端彼女の顔にはとてもじゃないが似合わない不安の色が混ざり込んでこう声をかけてきた。

「っ、辻村君？どうして突然そんな顔をするの？あたし何か辻村君に悪いことをいっちゃったかなっ？」

栗崎のそんな心配そうに尋ねてきたのを聞いて初めて自分の顔が洗面になつていたことを認識する。

俺は夢と聞いただけで無意識に顔を渋めてしまうほど敏感になつてしまっていることに意中で落胆する。

渋めた理由を挙げると言われたら、今朝見たこと以外答えようがない。つい思い出してしまったのだ。

…その程度で顔色を変える信号を送りやがる自分の脳はなんて愚かで滑稽なんだ。…

…
…今はとにかく誤解を解くことが先決か。

栗崎には未来永劫そんな顔をして欲しくない一途な心で、唇を窄めてやや上目遣いで心配してくれる栗崎にこう告げた。

「い、いや、すまん。今朝食ったゴーヤの味を思い出してしまつてな」

そら笑う。

笑顔100点常連者の栗崎がこの俺の作り笑いと自分の笑顔えがおを比較して採点したら、失笑しながら0点をつけるだろう。

「そんなことよりさ、普段はどんな夢を見ているんだ？」

話の軌道を俺から逸れるような形に整える。

そして彼女はうまくそのレールに乗ってくれ、パツと顔を明るする。

「ゴーヤなら仕方ないねっ。え？あたしが普段見る夢？んーとねー」

彼女の無垢な笑面と無邪気な態度に俺は救われたような気分になる。栗崎の女神すらも嫉妬するほほえみは万人の精神を穏やかに、そして落ち着けてくれると確信する。

「どうなんだ？」

雲を掴むより難しい栗崎の頭の中で繰り広げられる夢は、少なくとも達也より興味が湧く。

『すみませんね！見る夢まで夢がないやつで！』

そんな将来ニートしか職業選択ができない達也の声が、脳内でフルボイスで再生された。

…こつやつて馬鹿な事を考えて頭から遠ざけるしかない。

「ん〜…やっぱり聞きたいの？女の子が見る夢を。辻村君も男の子だねーっ！」

いやみのない晴れやかな笑顔でそういう。

その男の子だねーってなんだよ。

「まあそう言う事だ。教えてくれよ」

「しょうがないなあ、んじゃあ2日前みた夢をおしえちゃうとお」

大人の家庭教師が小学生を誘惑するような口調でそう言った後、
「ホンと咳払いをして準備を整え…」
ガラッ

突如俺達2人の行為以外で何かが行われる音がした。音的には扉を開閉するものであり、それは誰かが来訪してきたことを意味する。

「…！」

俺と栗崎は互いに顔を見合わせ、その姿を視認しようと音の出所である黒板側の扉に揃って注目する。

「…おはようございます」

…というその控えめな声を聞く前に俺は誰なのか理解することができた。

右手にGペンを持っていれば十中八九神納寺とわかるように、あんな黒曜石と見間違えてしまう黒髪を見れば誰なのかわかるものだ。

「おはよう、黒羽」

「おっはよーっ！」

その髪の毛の所有者に挨拶を返す。

黒羽はこちらを一瞥して誰なのか確認しどう判断したのかわからないが、軽い会釈を自分の机に向かいながらやってくれた。

しかし何度見ても反則級のかわいさだなあ…

…ん

そんな姿に半分見とれていると、彼女からふとなにか違和感を感じた。

ワンピース スヤBAKUM ANなんかがある今のジャンプの連載陣の中に『北斗の拳』が混じっているような、そんな時代錯誤を感じる違和感が。

下履きで歩くことにより奏でる音色のみが支配するこの教室の唯一の演奏者である黒羽に視線をロックオンしてその正体を確かめる。

『なめるように』と言っては語弊があるので換言する。黒羽の頭からつま先まで『隅々まで』視線を巡らせる。

そこでようやく俺はそのアナクロニズムじたいまぐに気付く。

この違和感の正体は人形だ。それも熊の。

黒羽の制服ポケットからひょいと顔を出している可愛らしい熊の人形が相当年季の入っているのか、随分色褪せていて、こういつては失礼かもしれないがボロボロだ。

…彼女から来るこのしっくりこない感じはどうやらあれからきているようだ。しかし存在感は申し分なく、可愛い黒羽が身につけているのなら尚更だ。

するとどうして彼女はあの人形を持っているのだろうかという疑問と、なぜあんなに大切に扱っているのかという疑問が同時に脳を埋め尽くす。

この疑問を解決する一番手っ取り早い方法は当然聞きに行くことだが、その思考に別の思考がぶつかってきてその早計な判断に釘が刺される。

その第2の思考が言うには『昨日が昨日だ、まだ彼女の警戒心が完全に解けたとは言い難い』…という早漏な第1の思考とは真逆な意見だ。

最もな意見であり、実際その通りである。新学期が始まって2日、焦る必要もないだろう。

…という脳内円卓会議をいざこざなく無事終わらせると、さっきか

らなにやらそわそわしている栗崎が俺に物欲しそうな目をキラキラさせているので脳を通常モードに切り替え、栗崎に応答する。

「…なにか言いたげだな」

目を細めながらそう聞くと待つてましたと言わんばかりに笑顔を咲き誇らせ、突然栗崎の顔が大きくなる。いや、それは遠近感の問題であり、実際はただ顔を近づけてきただけだ。

先程感じた甘い香りに意識を略奪されそうになるが、いかにもな平静を装い彼女の耳打ちに耳を傾けると俺は苦笑いする他無かった。

「ねえねえ辻村君、あの子黒羽…ちゃんだっけ？お互いよく知らないからもう一回自己紹介してきたほうがいいかな？」

…という栗崎らしい質問が耳に入り込んできたから。

これは1200円の350ml缶を買うか、30円足して500mlのペットボトルを買うか悩むとは比べものにならないくらい重大な決断を迫られており、生半可な返事をしてはいけない。

しかし、『コミュニケーションx』の達也とは違い『コミュニケーション』と『笑顔』のスキルを所持する栗崎なら、黒羽とうまく会話できるかもしれない。

それに同姓というアドバンテージもある、なんだ、何も心配しなくても勝利は必然なので俺は自信を持ってこう告げた。

「そうだな、やってこいよ」

「うんっ、いつてくるでありますっ」

椅子を後ろに引きずりながら立ち上がった栗崎は俺に敬礼をしてきた後、体を翻して黒羽の元へ。

これほど勝利が確定した戦いを見に行く事はないだろうと俺は幾分

「黒羽ちゃんの名前は？」

「はい、ゆきみです」

まるでこの囃は部活の先輩が入り立ての1年生に質問攻めするよう
なそんな感じた。栗崎に後輩ができたら、こんな光景が見られるの
かもしれない。

そのくらい、この光景はシユールだった。なんともほほえましい。

「ゆきみっていうんだ！可愛い名前だねっ」

「い、いえ…そんな…」

栗崎と黒羽がかみ合いそうに噛み合わないその微妙な距離を傍観し
て楽しんでいると…

「そんなことない…って、おっはよー！」

栗崎が突如言葉を切って教室の後ろのほうへ軽く手を挙げながら気
持ちの良い挨拶をする。どうやら誰かが来たらしい。

「うつす、おまえらはやいね」

すると先ほど脳内で再生された声よりクリアな声が俺の耳から聞こ
えてきた。

振り向いて誰かを確認するまでもないが、まあ挨拶がてらに向くと
する。

「よっ」

軽く挨拶する。

相手はなんだかんだで朝早めに来る、地球上に存在してはいけく、見るモノ全てが性癖に関わってくる正真正銘の H E N T A I、倉金達也がご入場してくる。

チラリと黒羽と栗崎を見て再び視線を俺に戻し、自分の席である俺の隣に腰を下ろす。

達也がチラ見した栗崎と黒羽は相変わらずの構図だが、話をしているので一安心だ。

達也は少々荒く鞆を机上に放り投げたかと思えばいきなり全身を俺のほうへ捻り、顔を近づけてくる。

栗崎の時とは違いまるで嬉しくない。やめる気持ち悪い。

どうやら耳打ちしたいらしい達也はその顔を俺の右耳まで近づけ、俺を破壊衝動へ導く呪文を唱える。

「え？あれ百合？」

ドムッ

「んほつつ？！や、やめろよ！朝食ったフルコースのフランス料理が飛び出るだろお！？」

どうしようもないくらい酷い思考をお持ちの達也の腹に一発入れておく。

「まったく…春巻きが飛び出してくるところだったぜ…」

フランス風春巻きですね、わかりません。大方冷凍食品の春巻きでも食ってきたのだろう。分類は中華だがな。

腹をさすりながらそう安堵している達也に、こちらもどうしようもないくらいの蔑視をし、こう言い放つ。

「お前あれが百合だというのなら、クラスの大半の人間は百合とゲイで溢れかえることになるわけだし、俺達も例外じゃあないだろ」
「は？…うええ…俺とお前の濃厚な絡み…？なんなの？馬鹿なの？死ぬの？」

引いている達也に春巻きだけじゃなくて胃液も吐き出させてやろうかと本気で迷ったが、食事中の方がいるかもしれないので主人公として自重しておく。

「やれやれ…」

「くっくっく、ぬしは面白いのう」

うるせえホ　口かお前は。エビフライぶっけんぞ。

「そんなことより」

さらっと話題を転換する。

そのくらい頭の切り替えが早ければお前はもうちょっと成績が良かったのかもしれない。

「今日俺が見た夢、聞いてくれよお」

両手を合わせ懇願するような態度を見せる。

他人が見た夢など、これほどどうでもいいことはない。だが脳内でねじ曲がりながら構築されるその奇っ怪さに誰かに話さずにはいられないのはわからないでもない。

…まあ暇は暇なので、変態の渠魁を務める達也さんの脳内で思うがままに料理された淫猥溢れ出るデッシュを、味見させてもらう。

「なんだよ」

そう聞くと自分の持っている能力をペラペラとドヤ顔でしゃべり出す敵キャラと姿が重なる達也がこういった。

「部屋に閉じこもっている俺が床ドンしながら『ババア飯はまだか！』っていう夢」

あたかも全国制覇した事を自慢げに語るような口調でそういいやがった。

「やれやれ…ついに夢でも世界は俺に嫉妬し始めたようで…」

「なんだ正夢か。お前が将来なる日常の断片を覗いてしまったみたいだな。夢くらい夢見ろよ」

「すいませんね！見る夢まで夢がないやつで！…ってちげえよっつ！…二ートになんかならねえよっつ！」

確かにこじつけた節はあるが、台詞回収したので、俺は満足だ。

視線を達也から外せば、少しうち解けたであろう黒羽と栗崎が互いに微笑みながら会話を交わしている。

それだけでも、大きな収穫だ。

そう、順調にいつているはずだった。

ガララーッガンッ！！

扉をカーテンと勘違いしているのではないかと疑うレベルの勢いでそれは開け放たれ、扉を開けられる範囲の許容を軽く逸脱して見事に反対側で激突する。

授業中だというのに随分場違いなそれは紛いなく奇怪なものであり、

クラス中の視線がそこに釘付けにされる。奇怪なものが浮いてしまうのは世の常であるが、大胆に扉を開し威風堂々と入ってきた奴もまたその常に全くぶれることなく付き従っていた。

「こらあ！静かに入らんかあ！」

というのは教師生活30年はあるであろう、顔に刻まれたシワがそのベテランさを体現している化学教師から。

時刻は11時を少し回ったくらいで、所謂3時間目の途中だ。

どう見ても遅刻してきた彼女らにその台詞は正論過ぎて何も言えない。…が、そんな言葉は彼女らにとって寝言以下の価値しかない。

「あ？うつせーよ」

反省の『は』も見せない彼女達。

3人組のど真ん中にある常に眉間にしわを寄せているような顔つきの女が、そう科学教師に喧嘩を売る一言を放った。教室の空気が凍り付いたように動かなくなる。

教師と彼女の4人だけがこの教室で動いて良い暗黙のルールが作られたかと錯覚してしまう程、4人以外のクラスの人間はただただ、黙り込んで動かなくなる。

俺もその1人であり、この情勢を見守ることしかできない。

「教師に向かってなんだその態度は！！」

衰えを見せながらもまだまだ現役である喉から怒声を教室に響かせた。

対して舌打ちして憎悪を一切抑えず全開にしている真ん中の女は残

り二人になにやら目配せする。

それを受け取ったかと思つたら、全員体を180度回転させて俺達に完全に背を向け、やがて姿すら消した。遠のく足音からも気怠さが伝わってくる。

「 ったく、あいつら…」

溜息混じりにそう漏らす教師。

これでまた一つ彼の皮膚にシワが刻み込まれたであろう。ざわ…と教師の溜息を皮切りに今までの一部始終に対してこんこんと積もらせた思いをクラスメイト達が一斉に吐き出し始める。

「今の凄かったねーっ」

「俺の全盛期の頃はあれの1万倍すごかったぜ？どや？」

誰がどの台詞を言っているのかは割愛する。

「ほらお前達！授業を再開するぞ！」

手を叩きながら授業の環境を再構築している。

授業を再開して1分もすれば、そこは先程のことなど無かつたかのようないつもの風景に戻る。

だがそれは徹頭徹尾無かつたかの『ような』だ。風景は平穏さを取り戻してもその心内は大きく荒れている。

それにしても…と俺は授業をすっぱかして頭を巡らせる。今どきここまで不良らしい不良はいない、どうしてもこれが最初に出る。

まるでそうキャラ付けされた不良が現実世界に紛れ込んできたかのようなのだ。

そのくらい、テンプレっていた。なぜか、なぜか違和感を感じてし

まうほどに。

この2日間過ごしてきて出る素直な感想だ。

そんな『不良』で人格形成された彼女たちを説明するのも億劫だが、一応しておく。うちのクラスメイトだ。

よくよく考えれば昨日黒羽に野次を飛ばしていたヤツらだったんだと説明しながら気付く。

その集団のど真ん中にいた、いかにもリーダーの風格を醸し出していた女は中原藍^{なかほらあい}。2年の後半から急にあんな風になったと聞く。

以前から教師達から問題視されているものの、手が付けられないというのが実情だ。

というのもいくら注意しても馬の念仏だというのは既に前提であり、それ以外の方法である彼女達の保護者へ連絡も、一切つかないため呼び出しようも注意しようもないからだ。

しかしこれはあくまで噂の域を出ないのだが、現実問題彼女らの親が全く姿を晒さない辺りこの説かなり有力だ。

そんな重い問題を抱え込んだ彼女たち3人をまとめてこのクラスに詰め込み、新米教師であるまかり先生に丸投げするこの学校は意外にブラックなのかもしれない。

キーンコーンカーンコーン

…と、中原達の行動とまかり先生の今後を杞憂しつつ授業を適当に受けていたら、あつと言う間に授業の終了を知らせるチャイムが鳴る。

俺にとっては実に好都合だ。先生が自分の教科書を名残惜しげに閉じる。

「はい、んじゃあ今日はここまでだ」

どうやら3時間目の休み時間に突入したらしい。

授業の鎖が解き放たれた今、生徒達が気儘に行動を始める。

「んん…はうう…っ…やああつと休み時間がきたですう」

とはいえ3時間目の休み時間はなんとも中途半端な休みなので、適当にすごすことが多い。

昼休み食堂へ戦争しに行く奴等はその契約書ちやくしょをゲットしに販券機へこれまた内戦する時間ではあるが、俺には無縁の話である。無縁と言えば先程の台詞も、だ。

「先程の台詞も、だ。じゃねーよっつ！ほら！話繋いでやったんだから昼飯くらい奢れや！」

生きていることすら勘違いしている達也が突然こちらを振り向き両手を開いてその間に顔を挟む形になり、そんな事をぬかしおる。

「お前の台詞が無くても話は繋がってたわボケ」

実に道理になかった正しい意見を述べると達也が目を斜めに伏せ、どこか悔しそうな顔になってこう言った。

「ば…馬鹿、こうして俺が喋らないとお前に…触れて貰えなくなるだろ…気付きなさいよ…」

さて、この休み時間をどのようにすごそう？

「つて無視すんなやゴルアアアアアアアア！」

- 1 達也と暇を潰す
- 2 栗崎と話す
- 3 購買部で飲み物を買ってくる

2は2で良いのだが、ここルートの分岐点なので絶対に3を選ばなければならぬ

ちよいと喉の渇きを潤すために購買部に行つてこようか。

： 帰りのことを考えると潤した喉もまた渴いてしまふんじゃないかと思つたが、飲みながら帰れば何とかかなるんじゃないかと思ひ直す。それに頭をつかつたんだし、糖分補給もしなければな。

休み時間は短い、そうと決めたならさつさと行動に移そう。

ガバガバの鞆から愛用して2年は過ぎる財布を取り出し立ち上がる。右手を見れば俺に無視されてふてくされたのか知らないが、なにやら文字を書いている。

： しょうがないので出番を増やしてやるか…。

「達也、一緒に購買部に行かないか？」

忙しく右手を動かし左手は添えるだけの達也に希望とも言える提案を試してみたが、達也は自ら断ち切つた。

プリントのほうに視線を固めたまま真面目ぶつた声で

「遠慮しておく。次の時間の英語のテストのためにカンニングペーパーを作らないといけないんだ」

…と見つければ単位すらお預けされる行為をさも当然のようにしている達也。こいつの辞書に『真面目』という言葉は登録されてないのかもしれない。
まあ俺もしたことがないと言えば嘘になるのであまり強く言えないが。

「せいぜい見つかって単位を落とすんだな」

捨てセリフを残して達也から離れて歩き出す。

「うぐう、俺と時間を潰せばカンニングネタがあつたのにい」

背後からそんなメタ発言が聞こえた。

悪いな達也、これもルートの為だ。

…というワケで特になにもなく購買部に到着する。

流石にこの時間はエサに群がるハトのような人だかりはなく、逆にスツキリすぎていて怖いとすら思えるレベルだ。

購買おばちゃん2人が、購買部の奥に三畳ほどある控え室でまったりと談笑している姿が伺える。

昼休みの開戦に向けての小休止と言ったところだろうか。

「あ、はいはいいらっしやい？」

だが俺の姿を見るとその顔はすっかり通常営業顔に切り替わり対応してきた辺りは年の功だろうか。

そんな休憩の邪魔をしてしまった事に罪悪感を覚えたくらいだが、まあ致し方がない。

俺は70円を支払って紙パックのコーヒー牛乳を買い、ありがとうとおばちゃんに軽い会釈をして購買部から背を向ける。

さて、また階段を上るという無駄な労働を勤しむことにしようと、ストローをぶっ刺して口につけた時だった。

「ん…」

スツと、かなり先のほうから見覚えがある姿が出現する。

しかもその姿には勢いというものが存在しており、言ってしまうば小走りでこちらに向かってきている。

ゆさゆさと揺れるそれは胸ではなく、黒いツインテール。

何を隠そう、最近やたら出くわす俺達のクラスメイトの1人である黒羽雪見であった。

いつもの彼女からは到底予想することができないその俊敏な動きに驚きながらも、高校生の女の子が廊下を走っているその異常事態に疑問を浮かばさずにはいられない。

急いでいるところ申し訳ないが、一応あいさつだけでもしよう。

静寂がいとも簡単に彼女の息づかいを捉え、駆ける足音をリズムよく響かせるこの廊下で俺は軽く手を挙げて彼女に話しかける。

「よう、廊下を走ると危ないから気をつけるよー」

「え？あ、はい？」

彼女の勢いあるベクトルが俺の冗談による真逆のベクトルで相殺したらしく、その足が止まり俺を認識する。

自惚れかもしれないが、俺だとわかった瞬間その堅い表情が少しだけ緩んだような気がした。

「あ、辻村さん」

黒羽は手を伸ばせば届く距離まで近づき会話ができる程度の息切れをしながら、その頭が下がる。

「す、すみません…急いでいるので…」

そう言うが否や頭を上げた彼女は再び加速し俺の横を躊躇いなく通り過ぎる。

「急いでいるところ呼び止めてごめんねー」

背中越しにそう謝罪する。

…

…何をそんなに急いでいるのだろうか。

今の急ぎようといい、この2日間ですら彼女の行動に不可解を感じる点はかなりある。

見た目で判断するのは正直間違っているが、それでも彼女のすることには後ろから糸を引いているヤツがいるような気がしてならないのだ。

その操り主は、俺に一つの可能性を示唆させるには要素がありすぎる。

…いや待て。

ここで俺の今し方やった行為を何故か冷静になり、第三者視点で見つめ返す。

どうして俺はこんなに彼女の事ばかり気にしているのだろうか。

今更になってそれに気付く。

その理由を考えるのは実に容易いものがあり、すぐにその解が思考回路に流される。

それは最初の出会い方にインパクトがあったという事と、よく見か

けるという事。

…いや、そんな単純な理由なんかじゃない。

それらを遙かに超えうる何かを俺は感じている。今の今までの彼女が行った行動に対する考察が正にそれだ。

そこまで意中で呟いたところでまた一つの可能性が浮かび上がる。

…俺は…3年当初靄が掛かって姿を見せなかった『目標』を見つけてしまったのではないだろうか。

具体的になにがどう目標なのかわからない、その達成方法もわからないが、そう脳が思わせるのだから仕方がない。

この気持ちを言葉にすることができない…一体どうなっているっていうんだ。

そんな私利私欲に近い感情で彼女の行為に兎や角沈黙考して、手を出して良いものだろうか。

現に俺は今から彼女の様子を見ようとまで思っている。

俺は…

1 様子を見る

2 帰る

フツ、と俺はこの選択肢を鼻で笑うしかなかった。

4月5日/水曜日(前) (後書き)

という訳で前半終了です。

辻村君の中になにかが芽生え始めているようです。

この後辻村君が取った行動は…？

それは次回で！

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5250w/>

はなだね small bouquet for you

2011年10月26日13時13分発行